ＩＦ　「仮定」の世界

宇野　宙人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＦ　「仮定」の世界

【Ｎコード】
Ｎ８１９１Ｘ

【作者名】
宇野　宙人

【あらすじ】
ＩＦという超能力が普通に存在する世界。その世界で平和な日常を望む主人公・鏡音友人は、ある日の帰り道に一つの事件と一人の少女に出会う。
そして、そこから始まる大きな事件に友人は嫌々ながらも巻き込まれていく。

プロローグ

ここは超能力が人間の技術によって理解・開発された未来の世界。超能力はｉｎｔｅｒｆｅｒｅ　ｆｏｒｃｅ（干渉力）縮めてＩＦと呼ばれている。

その能力は、触れずにモノを動かす、遠く離れた人の意識を読み取る、炎や電気を生み出すなどさまざまあり、その力は計り知れなかった。

故に世界はＩＦの力を受け入れる方向へと流れ、ＩＦの力によって世界の技術は大きく進み、変わっていった。

その結果、ＩＦは世間に浸透し、ＩＦが起こす常識離れな事象も今では日常の一部と化していた。

第1話　「鏡音友人」の世界（前書き）

ども、宇野宙人です。初投稿なのでいろいろと戸惑いの連続です。拙い文章ですが、頑張って書きました。感想や文に対する指摘があれば、気軽に送ってください。

第1話　「鏡音友人」の世界

さて、今の状況をざっと説明しておこう。

オレの目の前には、およそ十数人のガラの悪い不良たち。
そして、すぐ後ろにあるのは高い壁。
おまけにここは路地裏の一本道で、人が来るようすも無い。

十人中十人が絶体絶命と答えるであろうこの場面の真っただ中にいる、オレこと鏡音友人（かがみねゆうと）はどうしてこんな状況（こと）になってしまったのか。
それは三十分ほど前まで遡る。

発端はいつもと変わらない帰り道を一人で歩いている途中のこと。
見慣れた町並み、見慣れた空、そして見慣れた自分の家にもう少しで帰れるというところで、鞄からいきなりオレの携帯の着信音が鳴りだした。
携帯を取り出して、画面を見てみると、そこにはオレがよーく知っている名前、七橋奏（ななはしかなで）の三文字があった。

（あいつ、また何か厄介事にでも首突っ込んだのかなぁ～。）

奏はオレの幼馴染で、昔からとんでもなくお人好しな性格をしてい

る。
そのため、困った人を見過ごしておくことができず、そのせいでいろいろなトラブルにしょっちゅう首を突っ込んでいる。
そしてそのときは（迷惑なことに）ほとんどの場合、一緒にいるオレも巻き込まれる。
故に、奏から電話をもらったとき、真っ先に何かトラブルが起こったのではとオレが思うのも無理のない話というものだ。
だが、奏と一緒にいるために、オレがトラブルに巻き込まれることは多々あるが、奏からオレを直接トラブルに巻き込んだことは、あまり無い。
（そもそも奏は、オレと違って周りを巻き込もうとはせず、できるだけ自分の力だけで解決しようとするからな）
考えすぎかと思い、俺は電話に出る。
「はい、もしもし」
「・・・・・・鏡音友人か？」
奏とは明らかに違う、低い男の声が携帯から聞こえてきた。
「・・・お前は誰だ？奏じゃないな」
「そうだ。お前の友達は今、俺たちが預かっている。返して欲しければ、二丁目にある廃工場まで来い。おっと、警察や先公には連絡すんじゃねえぞ。お友達を無事に助けたければな」
フハハハっと耳につく高笑いを最後に電話が切られた。

（やれやれ、やっぱりまた面倒なことに巻き込まれたのか。あいつは。）

はぁ～っと長いため息の後、オレは渋々奏を救うべく廃工場の方へ向かった。

その後ろでじっとオレを見続けている一羽のカラスに気が付いたのは、そのすぐ後だった。

オレが電話を受けてから、三十分後。オレは二丁目の廃工場の裏側にいる。

ここは、中にいる人間からは死角となっているため、オレの存在は気付かれていない。

この廃工場は不良の溜まり場となっていることで有名な場所であり、現に今も十数人の不良たちがたむろっている。

その中で、おそらくこの不良のボス的存在の奴（たぶん、オレに電話をしてきた男）の隣に、明らかに不良とは違う少年・奏がいた。

名前のせいでよく誤解されることが多いのだが、奏は男だ。

しかも結構整った顔立ちをしていて、女子にとても人気がある。（友達とはいえ、むかつく）

ここから見る限り、奏はかなりの暴行を加えられたようだ。体中が

ぼろぼろで、さっきから全く動いてない。

（まぁ、あいつにとってはこんなのは日常茶飯事なんだが、しかし、奏を捕まえたということは、あいつらの中に能力者がいるな。）

奏は能力者なので、普通の不良が奏を捕まえるのは極めて困難なことなのだ。

（まぁ、そんなことはどうでもいいか。オレは、あいつらと共に作戦通りにやれば何も問題ないはずだ。）

「んじゃ、五分後に今聞かせた作戦を開始するから、これ自分の周りに置いて待ってろよ」

オレはそう言うと、手に持っていたビー玉を目の前にいるカラスにくわえさせた。

五分後、オレは百円ライターで、仕掛けておいた花火の導火線に火を点け、急いで物影に隠れる。

シュルシュルシュルルー…パーン。

結構大きな音が響き渡った。

当然、この音を聞いた不良たちが何事か、とやって来たり、音のした方へ注意を向ける。

その一瞬の隙を俺たちは突く。上手くやってくれよ！みんな。

「オイ！あいつはどこへ行った。まさか、逃げられたのか」
「分かんねぇよ！　あの音に気を取られてる間にいなくなっちまったんだ！」

怒鳴り声の後に困惑する声、こういう声が聞こえてきたということは、作戦が成功したということだ。
ミッションコンプリート。

さ～て、オレは奏を取り戻したから、後はこの物影に隠れながらこのまま不良たちがいなくなるまでやり過ごせば何も問題ない・・・・・

チャラララーララッラ～♪

ってオイ、何でこのタイミングで携帯が鳴るんだぁ！

「ん？　そこに隠れているのは誰だ！」

ああ、もう。不良のボス的存在だった奴に見つかっちまったじゃねぇか。

このままじゃヤバいので、オレは全速力で廃工場から逃げた。
すると当然のごとく、不良どもが追いかけてくるわけだが・・・・・
多すぎるだろ！
ていうか何で全員がこっちに向かって来るんだよぉ～～～！

そんなこんなで現在にいたるわけである。オレの携帯に電話した奴め、覚えてろよ！

「散々逃げまわっていたようだが、これでお前はもう逃げられないぜ」

不良のボス的存在・・・・もう面倒だから不良Ａとでもしておこうか、不良Ａが勝ちを確信したような笑みを浮かべながら言った。

「ったく、無能力者（いっぱんじん）のくせに、この俺を手こずらせやがってよぉ！
だが、それもここまでだ。さ～て、あのむかつく善人気取りの奏とかいう奴の分まで、憂さ晴らしさせてもらおうか！」

不良Ａはそういうと、手の平から一瞬でサッカーボールくらいの大きさの炎の球を出した。やはりこいつは能力者だったか。
発火能力（パイロキネシス）。文字通り、炎を作り出す物理干渉系のＩＦ。
炎を作り出すときの速さといい、大きさといい、結構な手練のようだ、とオレは目の前で起こったことを観察していた。

「ハッ、こいつ、ビビッて声も出せねぇってか」
「仕方ねぇよ。これを見りゃ、誰だってビビるさ」
「違ぇねえ」

不良Ａとその取り巻きどもは、黙っているオレを恐怖で口が開かないと勘違いしたらしく、ゲラゲラ笑い始めた。

「オイ、友人とかいったか。今すぐこの俺に泣いて土下座すれば少しは痛い目みないよう、考えてやってもいいぜ」

ニタニタと笑い、明らかに相手がどんな反応を示すか楽しんでいるような声。聞いてるだけで、不愉快になるな。

「オイ、どうした。何か言ってみてらどうなんだ」

はぁ～。俺は盛大なため息（今日で何回目だ）をついた後、不良Ａに視線を向けながら言った。

「不良Ａ」

「はぁ？」

「お前は二つほど間違っている」

「あぁ？何が間違ってるんだ？」

今まで黙ってた男が急に口を開き、意味深なことを言ったので、不良Ａは自分が名前で呼ばれてないことには突っ込まずに聞いてきた。

「まず、初めにお前はオレに『もう逃げられない』と言ったな。確かに、今オレは三方を不良に囲まれているけど、ここがガラ空きだ」

オレは後ろにある壁を軽く叩きながら言った。

「はぁ？何言ってんだ、お前は」

全く意味がわからないという表情を浮かべた不良Ａと取り巻きどもを無視して、話を続ける。

「そして、もう一つの間違いは・・・・」

そう言うやいなや、オレは垂直な壁を走り出した。

「オレは無能力者（いっぱんじん）じゃないんだよ」

第2話　「仲間たち」の世界（前書き）

キャラクターを少々作りすぎました。（上手く回せるか心配・・・）
第2話です。

第2話　「仲間たち」の世界

翌朝、学校に行く途中で、オレは奏を見かけたので声をかけた。

「よっ、奏。怪我はもういいのか」

「ん？　あぁ、友人か。うん、まぁね、そんなにひどくなかったし。それよりも、今回友人たちにはいろいろと迷惑かけたね」

「いつものことだ、気にしろよ」

「そこは『気にするな』と言うところじゃないの？」

「お前がオレを巻き込むことに気にしなくなったら、オレの体が持たん」

「うっ、ごめん。でも、大丈夫だった？　僕を助けた後で、山吹が携帯に電話したみたいだけど全然出なかったから、何か大変な目にあったんじゃないかって心配してたよ」

「（その電話のせいで、オレは大変な目にあったんだが、）まぁ、大丈夫だったぜ。これでも一応、お前と同じ能力者だからな」

あの後、悠々と壁を登り切り、反対側に渡ったオレは、不良どもから無事に逃げきることに成功した。

「にしても、奏。一体何があったんだ？」

どうせこいつのことだから、人助けだとは思うが。

「帰り道で、中学生くらいの女の子があいつらに襲われそうになってるのを見かけてね、その子を逃がせたまでは良かったんだけど、あの炎を使う能力者に捕まっちゃったんだよ。それで、僕を痛めつけても怒りは治まらなかったみたいで、友達も痛めつけてやろうとあいつらは友人に電話をかけたんだ」

オレはあの不良どものむかつく言動を思い出しながら、あいつらならそれくらいのことはやりそうだなと思った。全く、酷い奴らだ。

「というかさ、お前も見境なく行動するなよ。この町には学生能力者警団だっているんだし、そこに連絡するだけでも良かっただろ」

学生能力者警団とは、能力者・無能力者の犯罪や暴動を、取り締まったりする、能力者による警察の学生版で、定期的に町をパトロールしている。

「でも、学生能力者警団だって完全に犯罪を未然に防げるわけじゃないでしょ。連絡してる間に怪我したら元も子もないし」

「それは、そうだが・・・・・」

奏がかばって、怪我したって元も子もないと思うが。

「つーか、それならお前が学生能力者警団に入ればいいじゃねぇか。そうすれば、お前もいろいろと都合がいいだろう」

「僕は、あくまで一般人として自由に人を助けたいんだよ。義務とか規則とかじゃなく」

「さいですか」

それはまた、殊勝な心掛けで。

「それに学生能力者警団は厳しい適性テストをくぐり抜けたエリート集団、僕なんかとは格が違うさ」

まあ、確かに学生能力者警団は毎年、数百人もの志願者がありながら、合格者は十人、二十人くらいしかいない超倍率といわれている。

現にオレの通う学校にも何人かの能力者はいるが、学生能力者警団（キープ・ガード）は一人もいない。

（でも、学生能力者警団（キープ・ガード）と同等かそれ以上の実力者なら一人いるけどな）

オレは彼女のことを思い浮かべながらそう思った。

「それはそうと、今朝のニュースでやってたんだけど、昨日の夜中に刑務所から囚人が集団脱走して、未だ行方知れずなんだって」

「マジか！　それはまた、物騒だな。もしかしてそいつらって能力者か？」

「うん、能力でたくさんの罪なき人の命を奪った凶悪犯だって、テレビで言ってたんだ。警察の捜査によると、空間干渉系のＩＦを使う人間が外部から手伝ったらしいんだって」

なるほど、空間干渉系か。

ＩＦには大きく分けて３つの種類がある。

まず初めに、物理干渉系。これは物体の運動や、性質・形態変化、自然現象なんかに関わる能力で、代表的なのは念動力（サイコキネシス）や発火能力（パイロキネシス）。

次に空間干渉系。空間に関わる能力で、代表的なのは瞬間移動（テレポート）。

最後が精神干渉系。人や動物の思念（精神）・五感に関わる能力で、代表的なのは念話（テレパシー）と、こんな感じで分けられている。

ちなみに、３つの中では物理干渉系のＩＦを持つ人間が一番多く、空間干渉系が一番少ない。

（割合にすると大体　物：精：空＝６：３：１　となる）

「だけど、そんな危険な奴らなら能力者専用の刑務所に入れられているはずだろ。たとえ、高度な空間干渉系の能力者が手伝っても上手くいくとは思えないけど」

「だから、警察の方でも悩んでるみたいだよ。何せ、こんなことは前代未聞だからね」

そんな話をしながら、学校へ向かっていくと小学生くらいの女の子が一人、木を見上げておろおろしていた。当然、奏はその子をほっとけるわけがなく話しかける。

「どうしたの。何か困ったことでもあったのかな。」

奏が優しく声をかけると、その子は恥ずかしそうにうつむきながら、答えた。

「あ、あのね、カナの帽子が風で・・・」

見ると、木の上の方の枝に黄色い学生帽が引っかかっている。かなり高い場所にあるうえに、木の幹は太く、道具もなしに登るのは無理そうだ。

「あれか。大丈夫だよ、カナちゃん。今すぐ取ってきてもらうから」

そういうと奏はそこらへんの電線にとまっているカラスを見つめた。すると、突然カラスが羽をはばたかせて飛び、木の枝に引っかかってる帽子をくちばしでくわえて奏の手の中に持ってきた。奏はその帽子を笑顔で少女に渡す。

「はい、どうぞ。」
「うん・・・・・・・ありがとう。お兄ちゃん」
カナという子はまるで訓練を受けたかのようなカラスの動きに、ちょっと驚いていたようだが、帽子をとってくれたことに感謝してお礼を言い、頭を下げた。
「どういたしまして。もう、風に飛ばされないように気をつけてね」
「うん！　本当にありがとう」
そう言うと、奏から手渡された帽子ををかぶりタッタッタッと走って行った。
「しっかし、いつ見ても面白いな、お前の能力は」
去っていくその子が見えなくなったときに、オレは口を開いた。
そう、これが、奏の能力・獣王（ソロモン）。目で見た動物（脊椎動物のみ）と意識をつなぎ、五感を共有し操る精神干渉系のＩＦ。
奏はこの能力を使って、いろいろなトラブルが起こった場所を把握し、解決のために動いているのだ。
「その能力と心意気があれば、学生能力者警団（キーブ・ガード）にとっては貴重な存在になるとオレは思うんだけどねぇ」
全くもって、残念だ。奏は努力家だから頑張ればイケるかもしれないのに、学生能力者警団（キーブ・ガード）に入ろうとしないなんて。
「で、本音は？」

「奏が学生能力者警団（キープ・ガード）に入れば、オレへの被害が減ると思ってな」
「そんな事だろうと思ったよ」
オレたちは再び学校へと歩き始めた。

オレたちが通っている、夕波高校はどこにでもある普通の公立高校だ。
偏差値もとりわけ高いわけでも低いわけでもなく、強豪と呼ばれてる部活動もない。
強いて特徴をあげるとすれば、入学時に全ての新入生に座右の銘とか目標とかを四字熟語で書かせることだろう。ちなみに、オレが書いたのは『他力本願』で、奏は『一日一善』だ。
オレたちが１－Ａの教室に入ると、一人の男子生徒が話しかけてきた。
「よう、友人に奏。昨日は大丈夫だったか？」
声をかけてきたのは、クラスメートの前原山吹（まえはらやまぶき）。
つんつんと、とがった髪の毛が目立つ、体育会系。明るく、竹を割ったような性格のため仲間が多く、いつも周りに人がいる。彼が書いた言葉は『全国制覇』で、サッカー部でレギュラーを目指して頑張っている。
「うん、もう大丈夫だよ。山吹にも迷惑かけたね」
「山吹、オレはお前が電話をかけたせいで酷い目にあったぜ」

奏はすまなそうに言い、オレは文句を言う。さっきからの言動でもわかるように、山吹は、オレと共に奏救出作戦に協力してくれた仲間である。

「そういえば、論道君の姿が見えないけど、今日は休み？」
「いや、今日の朝に上級生と何か戦りあったらしくて、生活指導部の方に呼び出されたんだよ」
「やれやれ、またか」

鳴岡論道（なるおかろんどう）は目つきが鋭く、少し不良っぽい雰囲気をもってるせいで、上級生によくからまれるオレたちのクラスメートだ。

まあ、根は悪い奴ではないんだが、ぶっきらぼうなとこがあり、周りからは結構恐れられている。
でも、顔はかなりイケてる方で、恐そうなところがまたイイ！とかいう女子たちの間で、かなりもてる。その人気は奏とクラスいや、学年で一位二位を争うほど。（本ッ当にむかつく）

彼が書いた言葉は『悠々自適』。論道らしい一言だな。

「そっか、論道君にも一言お礼を言っておきたかったんだけど。心配させちゃったからね」

奏が残念そうな顔をする。正直、論道はあんまり心配してないとオレは思うが。

「（ぼそっ）……僕も心配した」
「ん？　奏何か言ったか？」
「いや何も言ってないけど・・・・・・」

おかしいな。今確かに、声が聞こえたような気がしたが。

「・・・・・・僕」

声のする方へ振り向くと、前髪で顔を半分隠した男子生徒がいつの間にかそこに立っていた。

「うわっ、びっくりした～」

「いつからいたんだ？」

「いるならいるって言って欲しいぜ」

奏、オレ、山吹は目の前にいる及川楽也（おいかわがくや）にそれぞれ思い思いのことを口にする。

物静かで口数が少ないとか、あまり人といっしょにいるところを見たことがないとか、いろいろ理由は考えられるが、楽也は影が薄い、目立たないとかいうレベルじゃないくらい存在感が無い。

故に、今みたいに本人にその気はないのだが、知らないうちに現れて、よくみんなに驚かれる。

そんな彼が書いた言葉は『暗中飛躍』。人に知られないように、ひそかに活躍するという意味だが・・・・まぁ、ぴったりといえばぴったりだ。

「・・・・・・・・・・・・・みんな、いろいろひどい」

楽也はオレたちの言葉に落ち込んだようで、とぼとぼと自分の席に戻って行くのを、慌てて追いかけて奏が慰める。うん、よく見慣れた光景だ。

「大変だな。奏も」
「そうだな」
オレたちは必死に慰めてる奏を見ながら、他人事のように呟いた。
「そういやーさ、何で楽也まで昨日のこと知ってんだ？」
確かあいつには連絡してないはず、というかそもそもオレは論道にだけ協力を頼んだはずだが。
そう思って、オレは隣にいる山吹に聞いてみた。
「ああ、昨日お前が論道に連絡したとき、偶然その場にいたんだよ。楽也も同じくな。まぁ、楽也は塾があったせいで来れなかったけど、かなり心配してたぞ」
「ふ～ん、そうかそうか。だから連絡してない山吹まであそこに来たのか」
「そういうこと。それにしても水臭いぞ、友人。何で奏を助けるのに俺を呼ばなかったんだよ」
「だって、山吹は無能力者（いっぱんじん）だろ。実際、いてもいなくてもそんなに変わらなかったしな。」
そう、このクラスにいる能力者はオレ、奏、論道、楽也の４人だけだ。
「酷っ！　いくらなんでもそういうこと普通ストレートに言うか！」
「事実だろ」
「う、・・・・・チクショウ！　何で俺だけ能力が無いんだぁ！」
山吹はそう嘆きながら、廊下に出て走っていった。もうすぐ、ＨＲ

が始まるというのに。
オレは自分の席に着きながら、先生が来るまで一眠りすることにした。
あ～今日も平和だなぁ。

さて、四時間目の授業も終わり昼休みになったので、オレと奏は一緒に屋上へと向かった。屋上は基本的に解放されているが、利用者が少ないので静かなところが、オレは気に入っている。
ちなみに、山吹は部活の仲間となので今日は一緒ではない。
青く晴れ渡った春の空の下、オレは持ってきた弁当を広げた。
「あれ？　奏、お前は今日、購買でパンを買う日じゃなかったか」
奏の両親は共働きなので、週のうち何回かは購買で昼飯を買うはずなのだが、今日は弁当を持ってきている。
「ああ、これは数日前に助けた女の子がお礼にって作ってくれたんだよ」
奏、お前はどんだけトラブル解決しまくってるんだ。
「そうかそうか、それは良かったな」
けっ、奏はそうやって・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・また女子とのフラグを成立させていく」

そうそう。ん？

「楽也！　いつの間に来たんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・君たちが来る前からいた」

マジか！　例によって、全く気付かなかった。

「しかし、珍しいね。楽也はいつも教室で食べるのに」

奏が海老フライを口にしながら、楽也に話しかける。

「・・・・・・・・・・・・・・なんとなく屋上で食べたい時もある」

ああ、左様で。

「確かにその気持ちはわかる。ここは日当たり良好、風通しも良く、とても静かで人が少ない。この学校でここ以上にくつろげる場所は無いと言っても過言ではないな」

突然、一人の二十代くらいの若い男性が屋上について語りだした。

（っていうか、この男性（ヒト）もいつの間に来たんだ？）

「・・・・・・・・・・・・」

「センセー、そんなに熱く語るほど、ここに来たがってたわけじゃないんですが、っと

楽也は思ってますよ」

「友人、わざわざ説明しなくても・・・・」

「いやぁ、かくいう先生も学生の頃はよくここで・・・・」
「・・・・・・・・聞いてない」
「そだな」
「うん」

誰も聞いていないのに一人で勝手に話を進めているこの無駄に熱い人は、俺たちのクラス１－Ａの担任の田端（たばた）先生。

教師になってまだ3年という新人の先生で、今どきめずらしい熱血漢。若いということもあってか、生徒には親しみやすいと評判ではある。
だが、時々こうやって一人でいきなり昔のことを話し始めるというところに困っている生徒は多い。

「っと、話は変わるが鏡音、七橋、及川」

先生は急に真面目な顔をして、オレたちの名前を呼んだ。

「もう知ってるかもしれないが、昨夜に刑務所から集団脱走あって、未だ囚人の一人も捕まっていない。それどころか、足取りさえもつかめていない。その刑務所付近の町々は危険な状況下にあるので、住民に注意するようにと警告が出された。ここも、距離としてはそう遠くない場所にあるし、囚人が潜んでる可能性も０じゃないから、しばらくは警戒態勢が続くだろう。お前たちも十分気をつけるんだぞ。詳しいことは明日の緊急朝礼で校長先生が話すからな」

先生は、よく言い聞かせるようにオレたちに話した。
確かに、この辺に脱獄囚が潜んでるのなら、警告するのは当然だろう。

だが、

「先生」

「ん、何だ？鏡音」

「明日話すなら、どうして今、わざわざ言うんですか？」

「わからないのか、お前たちはこの学校きってのトラブルメーカーだからな、危ない目に会う前に釘を刺しておきたかったんだよ」

「それは少し心外ですねー。オレはトラブルに向かって行ってるのではなく、トラブルの方からこっちに向かってくるんですよ」

トラブルメーカーなのは奏だけで、オレはただ巻き込まれているだけだ！　と言いたい。

「まあ、でも用心するのに越したことはないだろ。しばらくは気を付けるように」

そう言って、先生は屋上から出て行った。

「やれやれ、何とも物騒なことだな」

「・・・・・・これからはあまり外に出ない方がいいかも」

「そうだね。」

オレたちは弁当を食べ終え、教室に戻る途中で屋上で先生に言われたことを思い出していた。

まさか、奏の言ってた脱獄囚がこの辺にいるかもしれないなんて、物騒極まりないな。

おそらくこれからは、町の人たちにとっては不安な日々が続くだろ

う。
早く捕まるといいんだが。
そんなことを考えながら廊下の角を曲がろうとすると、突然、ものすごい勢いのある水流が人を押し飛ばしてるのが、目に入ってきた。その飛ばされた人は壁に体を強く打ちつけて、そのままぐったりと動かなくなった。
「はあ、いくら何でもやりすぎなんじゃないですか。会長。」
オレが、水が飛んできた方向に目をやると、そこにはすらっと背の高い、凛とした空気を纏わせている女性、辻志季（つじしき）先輩がいた。
2年ながら、夕波高校の生徒会長に就任した、成績優秀、容姿端麗、運動神経もよく、ＩＦも学生能力者警団（キーブ・ガード）のトップに匹敵する実力を持った完璧人間。
故に、非公式の巨大なファンクラブもあるという噂もあるほど、男女問わずに人気がある。うちのような平凡な高校にいるのが、とてつもなく不思議な人だ。
「ん、ゆーじんか。よく私だと気付いたな。」
そりゃ、気付くわ。廊下で人に向かってＩＦ使うのは、会長くらいだからな。
てか、そのあだ名いい加減やめい。
楽也が伸びている男に駆け寄って、大丈夫ですか、と声をかけていた。
「で、話を戻しますけど、やりすぎです会長。この人気絶してるじ

ゃないですか」
「仕方ないだろ、この男が私に無礼な真似を働こうとしたんだ。これくらい正当防衛の範囲内だ」
そこで伸びてる男を指さしながら、会長(辻先輩)はさも当然といった感じで言いきった。

(いや、この男が会長に何しようとしたかは知らないが、明らかに無能力者(いっぱんじん)には強すぎるだろ)
横にいる二人も、どうやら俺と同じことを思っているようで、顔が引きつっている。(といっても、楽也の表情はわかりにくいが)
「えっと、辻先輩。とりあえずこの人を保健室に運びませんか?先輩のＩＦをまともに受けて、結構なダメージを負ってますし」
奏が、遠慮がちに提案する。
確かに会長のＩＦ、液体操作(リキッドコントロール)をくらったら・・・・ヤバいな。
「うむ、それもそうだな。じゃあ、こいつを運ぶとするか。」
そう言って、会長は伸びている男の襟をつかみ、ずるずると引きずっていった。

「・・・・・・なんつーか、相変わらずだな。会長は」
「・・・・・・・・・中学の時からまるで変わって無い」
「ハハハ・・・・・・・・そうだね」

オレたちは、あらゆる意味で凄い怪超・・・・もとい会長という存在を再認識したのだった。

第3話　「彼女との出会い」の世界

まだ青さの残る空の下、オレは帰路に就いていた。基本、オレは帰りは一人。
奏と山吹は部活があるし、論道は……仲間と言えるのか微妙なとこ。
で、オレは今、一人で帰っていたのだが・・・・・・

「退けっ！邪魔だ！」

怒鳴り声とともに、オレはいきなり後ろからやってきた黒い服にニット帽をかぶった男に突き飛ばされた。
突然の出来事に、オレはその力に抗えず地面に体を打ち付ける。

「イテテ、何だったんだ、一体？」

ぶつかった箇所をさすりながらオレが体を起したのと同時に、ＫＧというバッジを胸に付けた一人の少女が目の前を走り去っていくのが見えた。

「待ちなさい！　そこの男」

待て！　と言って素直に待つ奴はおそらくいない。当然、彼女の言葉を無視して男は走り続ける。

「待ちなさいって言ってるでしょう！」

そう言うと彼女は、手の平を地面に押し当てた。

すると、瞬く間にそこから地面が凍りだし、さっきの男はその凍った地面に足を滑らせて派手に転んだ。

「学生能力者警団（キープ・ガード）から、そう簡単に逃げられると思わないことね。さあ、おとなしく捕まりなさい」

威圧的に彼女は言うと、その男の反応を待った。この状況、普通に考えれば男の方が断然不利だが、

「へっ、そんなに簡単捕まってたまるかよ」

男は反抗的にそう言い放った。

その台詞には、虚勢ではなく確かな自信をもった響きが含まれていた。

「は？　何を言ってるの」

不思議そうな顔をする彼女の前で、その男はにやりと笑うと、一瞬……で姿が消えた。

「っ！！」

彼女は目の前で起きたことに驚きを隠せないでいたが、すぐにすごく悔しそうな表情に変わった。

「しまった、逃げられた。まさか奴が瞬間移動（テレポート）の能力者だったなんて」

迂闊だったっと彼女は、がっくりと項垂れた後、犯人を取り逃がし

た悔しさからか、電柱に拳を打ち込み始めた。

（やれやれ、何かめんどい場面に出くわしちまったなあ）

どうやら、何らかの事件の犯人を捕えようと追いかけてきたようだ、とオレは一部始終を見ながらそう思った。

いつもなら、面倒事は避けるオレだが、目の前で起こってしまった以上、見過ごす訳にもいかないので（これは奏の影響か）、オレは未だ拳を打ち込んでいる彼女を尻目に、ポケットから携帯を出した。

今までの一連の様子を見て考えた、自分の仮説を裏付けるために。

（クックックッ。思った通りあの学生能力者警団（キープ・ガード）の女は俺が瞬間移動（テレポート）で逃げたと思っている。しかし、何とか上手く騙せたはいいが、地面が未だ凍ってるせいで、走って逃げ出せないのがつらいな）

男はもどかしく思いながらも、ゆっくりとした足取りで現場から離れていく。

（もう、この辺りは学生能力者警団（キープ・ガード）が警戒するから、商売はしばらく休まざるをえんな。まあ、ほとぼりが冷めたら、また再開すればいい）

そんなことを考えながら歩いていると、男は突然後ろから強い衝撃を受け、そのまま凍った地面に顔面から激突した。

（な、何だ！）

男が振り向くとそこには、さっき逃げるときに突き飛ばした中学生くらいの少年が携帯をもって、立っていた。

（バカな！　まさかこいつ俺の能力を・・・・・・）

男が目をやると、その少年は満足げに頷いた。

目の前で、何も無い場所を携帯の画面越しに見ながらオレは、自分の読みが当たっていたと確信した。

そもそも、奴を瞬間移動（テレポート）の能力者と考えるには少々不自然な点がある。

瞬間移動（テレポート）が使えるのであれば、どうして追いつめられるまで使わなかったのか。

最初から使えばもっと楽に逃げられたはずだ。

つまり、奴の能力は瞬間移動（テレポート）ではなく不可視（インビジブル）、つまり見えなくなる精神干渉系のＩＦ能力ではないか、とオレは考えた。

そして、その仮説を裏付けるために、オレは携帯を使った。

精神干渉系の能力は機械には通じない。

故にオレは、携帯のカメラ機能を使い、奴を画面越しに見て、その

位置を把握したというわけだ。

（おそらく、奴が最初から能力を使わなかったのもこういう理由だろう）

奴がやってきた方向は大通り、人も交通量も多く、監視カメラもある。

そんな所で能力を使っても逃げるのは容易ではないし、本当の能力がばれる恐れもある。

だから、ここに来るまで使わなかったのだろう。

（まあ、結果的に捕まっちまったら意味ないんだがな）

オレを突き飛ばしたのが運の尽き。潔く捕まりな、名も知らぬ男よ。

「くっ、まさか俺の錯覚景色（ミスティクビュー）が見破られるとは・・・」

「さあ、能力もばれたことだし、おとなしく捕まりなさい」

いつの間にか、落ち込んでいたはずの学生能力者警団（キープ・ガード）の彼女が加わっていた。

「だが、俺の能力はこんなもんじゃないぜ」

そう言うと、男は錯覚景色（ミスティクビュー）を解き姿を現した。

「ばれちまったんならしょうがねえ。俺の真の能力（ちから）を見せてやる」

そういうやいなや、周りの景色がぐるぐると回り始めた。

「俺の錯覚景色（ミスティクビュー）は人の視覚に作用して、異なる景色を見せる能力。

それを応用すればこんなこともできる。さあ、いつまで耐えられるかな」

男は得意げな顔をして話している間にも、景色はどんどん回っていき今自分がいる場所すら分からなくなってきた。

「うえ、何か気持ち悪い」

彼女はもうすでに立っていることすら不可能なようで、その場に手をついて倒れてしまった。

（まあ、そうなるわな。こんなの見せられちゃあ平衡感覚がおかしくなるのが普通だ）

そう、普通なら。

「ハッハッハ、学生能力者警団（キープ・ガード）の女はもうダメみたいだが、お前は中々粘るじゃないか」

余裕たっぷりといった調子でオレを見る態度から察するに、おそらく奴はこの技、螺旋景色（スパイラルビュー）（勝手に命名）を破られたことが無いのだろう。

（だが、その油断が命取りだ）

オレは携帯の画面を見ながら、一直線に突っ込んだ。

第４話　「友人の能力」の世界

「な、何でお前は・・・・」

男は驚いた顔をして、こっちを見ている。

今のオレは奴からして見れば、かなり奇妙に見えたかもしれない。
いくら携帯の画面で確かなのが見えているといっても、もはや上下左右が全く分からない程ぐちゃぐちゃな景色の上に、足元の地面は凍っていて滑りやすい。
そんな状態で、標的（ターゲット）に向かってまっすぐ走れるなんてことは無能力者（じん）には不可能なことだからな。

「くっ！！」

男は自分の能力が効かないと分かると、一目散に逃げ出した。
まあ、当然の反応だが・・・・・

つるっ、ゴーン。

凍った地面の上を勢いよく走ったせいで男はもう一度盛大にこけて、地面に後頭部をぶつけた。
しかも今回は当りどころが悪かったらしく、そのまま気絶してしまった。
・・・・・敵とはいえ、この結末には同情するな。

「しっかし、結果的には助かったな」

実は、勢いよく突っ込んだのはいいが、その後どうするかは全く考

えてなかったのだ。
自慢ではないが、元々オレは喧嘩にはからっきし自信が無い。
ま、“終わりよければすべてよし”というし、気にしないでおこう。
「さってと・・・・・大丈夫か」
オレは、未だ気分が悪そうな彼女に話しかける。
「大丈夫・・・じゃない。まだ気持ち悪いわ」
彼女は口に手を当てて、よろよろと起き上った。
今まで、奴のほうにばかりに注意を向けてて気づかなかったが、彼女は結構、美人といえる顔立ちをしている。（今は気分悪そうな表情のせいで、美人には見えにくいが）
「・・というか・・何でアンタは・・平気なのよ・・・凍った・・地面も・・滑らずに・・走ってたし」
彼女は一言話すのもつらそうな感じで言った。
「アンタじゃない、鏡音友人だ。まあ、何で平気かというとそれはオレのＩＦが関係しているわけだ　が・・・」
オレは自分の能力について説明を始めた。
「オレの能力は摩擦力（ブレーキ）といって、摩擦力を増減する能力だ」
「摩擦・・・力？」
「そう、凍った地面や油を塗った床が滑りやすいのは知ってるよな。あれは物理学の世界では摩擦が少ないというんだ。つまり、摩擦を

上げてやれば凍った地面の上でも滑らずに走れる。さらに摩擦を上げれば壁を走り登ることもできる」

オレが昨日、不良に襲われたときに逃げれたのもこの能力のおかげだ。

「なるほど、だからアンタ、じゃなくて鏡音は滑らずにあいつのとこまでいけたのね。だけど、その摩擦力（ブレーキ）という能力があると、どうしてあの景色を見て気持ち悪くならなくなるのよ」

少し気分が良くなったのか、彼女はさっきよりもスラスラと喋る。

「さっきも言ったと思うが、オレは長年この能力を使って壁とかを歩いていた。その影響か三半規管が異常に強くなって、平衡感覚が体操選手並みかそれ以上になったというわけだ」

あの景色を見続けていると、平衡感覚がおかしくなって車酔いに似た症状が引き起こされる。

だが、人よりも強い三半規管を持ってるオレにはそんなのは効かないということさ。

「へ～なるほっ」

うぷっと調子に乗って喋りすぎたせいか、彼女はまた気分悪そうな表情となった。

「あ～今更でなんだが」

オレは彼女に気まずそうな声で言う。

「な・・・・何？」
「そんなに気持ち悪かったんなら、目を閉じときゃ良かったんじゃないのか」
「・・・・・・・・・・・・」
「あ～えっと」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・もっと」
「はい？」
「もっと先に言え！」

そう言われた後、物凄い勢いで正面から蹴りを入れられた・・・・・・理不尽だ。

その後、何分かして気持ち悪さから完全に回復した彼女は、呼び出した仲間の学生能力者警団（キーブ・ガード）と共に、男を連行した。
聞くところによるとこの男（名前は山田公一（やまだこういち）という）は、能力を使って万引きなどを行い、その盗んだ品物を別の場所で売りさばいていたらしい。

「しっかし、あの女め、本気で蹴りやがって」

まだ、若干痛む腹を押さえながらオレは、名前の知らない学生能力者警団（キーブ・ガード）の女を恨みながらオレは自分の家に着いた。全く、今日は散々な日だ。

自分の部屋に行って、ベッドに横たわった時、家の電話が鳴りだした。

（何か嫌な予感がする）

オレの直感がそう告げているが、出ないわけにもいかないので渋々受話器を取る。

「はい、もしもーし」
「ああ、友人」
「奏か、何か用か？」
「うん、実は・・」
「断る」
「ちょっと頼みたいことが、って早いよ！　まだ僕何も言ってないじゃん！」
「ああ、悪ィ悪ィ。何か嫌な予感がしたもんで」
「もう」
「で、頼みたいことって？」
「うん、実はね週末に、ちょっと買い物に付き合って欲しいんだけど」
「何だ、そんなことか。別にいいけど、どうせ暇だし」
「ありがとう。じゃあ、待ち合わせの場所と時間はおいおい伝えるよ」

そう言って、電話が切れた。だが、平凡な用事で会ったのにも関わらず、何故か嫌な予感が一層強まったような気がした。

第４話　「友人の能力」の世界（後書き）

やっと主人公の能力が説明されました。しかし作者である自分が言うのもなんですが地味です。

第5話　「会長ｖｓ転校生」の世界

あの事件から3日が経ったある日の朝。

オレが学校に来てみるとD組にかわいい女子の転校生がやってくるという話がクラスで飛び交っていた。

ま、小学生じゃあるまいし自分のクラスでないことにオレは別段興味はない。

だが、オレ以外のクラスメート（特に男子）はかなり興味があるようで、休み時間にはその転校生の姿を見に行ったり、転校生の話をしたりとかなり騒がしかった。

「なあ、友人。ちょっと見に行かねえか」

退屈な授業がやっと終わった昼下がりに、オレは山吹にそう誘われた。

そういえば、山吹はかなりの噂好きだったな。

「見に行くって、転校生をか？」

「そうそう、D組じゃあ大騒ぎしてるぜ。転校生の名前は片梨結（かたなしゆい）って言って、なんとあの学生能力者警団（キープ・ガード）に所属してるんだとよ」

「へ～そうなんだ」

そりゃすげぇな。

「な、だから見に行こうぜ」

「いやいいよ」

興味無いしね。

「ん～そうか。全くお前はいつもそうだよな。自分に関係ないことは関心が０というか」

余計なお世話だ。

「じゃあ、俺は見てくるから。もちろん、後でばっちり報告しとくぜ」

そう言って山吹は、教室を飛び出していった。

（別にしなくてもいいんだけどなあ）

やれやれ、と思いながらオレは昼飯を食べるために、いつものように奏と楽也に連られて屋上へ行った。

しかし、そこでオレたちはいつもと違う光景を目の当たりにすることとなった。

屋上の真ん中で二人の少女が対峙している。

二人の雰囲気は穏やかなものではないが、互いを敵視してるという

ものでもない。
例えるとするなら、剣道の試合を行う前のようなピリピリとした緊張感が漂ってる感じだ。
ここに入学してからほぼ毎日来ている、屋上の常連であるオレたちもこんな場面は見たことが無い。
というか、ここにはオレたち以外あまり人が来ないんだけどね。
良く見てみると、二人の少女のうち一人はオレらがよーく知っている会長、辻先輩で、もう一人は山田公一の逮捕の時に出会った名も知らない学生能力者警団（キープ・ガード）の彼女（ていうかウチの生徒だったのか）だった。
「なあ、一体何が起こってんだ？」
オレは全く状況が理解できないので、隣にいた奏に聞いてみた。
「ちょっと待って」
奏はそう言うと、近くにいた鳩に能力をかけた。
奏の獣王（ソロモン）は対象とした動物の記憶まで知ることが可能なのだ。
「えっと、なんでも今日転校してきた彼女が学生能力者警団（キープ・ガード）の人間で、そこで度々ウチの会長のことを耳にしていたらしく、実力が知りたいって言って、今、決闘を申し込んだところなんだって」
決闘って、いつの時代だ。つーか、あいつが転校生だったのかよ。
心の中でツッコミを入れつつ、オレたちは弁当を広げる。
観戦しながら昼食をとるのも、また一興。

「なあ、ただ見てるのも何だしどっちが勝つか賭けねえか」
「いいよ」
「・・・・・・・・・・同じく」
「んじゃあ、オレは会長が勝つ方に百円な」
「僕もそれで」
「・・・・・・・・・右に同じ」
「それじゃあ、賭けが成立しないでしょ！！」
いつの間にか目の前にいた彼女にオレたちは盛大にツッコまれた。
「って、アンタはあの時の！」
「だからアンタじゃなくて鏡音友人」
てか、今気付いたんかい。
「なんだ、片梨はゆーじんの友人だったのか？」
会長も話に加わってきた。というか会長、それは洒落のつもりなのか、だとしたら全然面白くないぞ。そして、ゆーじんと言うのはやめろ。
「いやいや、友人じゃないですよ。そもそも、オレは理不尽な暴行を加える人間との絆なんて欲しくないですし」
冗談じゃないとオレは即座に否定する。
「あの時のこと、まだ根に持ってるの」
片梨が、ジト目で睨んできた。当然だろ、オレは最低でも一カ月は

根に持つ男だからな。

「ごめんごめん。静かにしてるから、続けていいよ」

奏が険悪になりそうな雰囲気を察して、早々に言い合いを切り上げようとした。

「ったく、そもそもアンタたちは私が勝つとは思わないの？」

「無いね」

「ごめん、無いと思う」

「・・・・・・・・・右に同じ」

「何でそうキッパリ言い切れるのよ？」

片梨が不思議そうに聞いてきた。ふっ、愚問だね。そんなの決まってるじゃないか。

「だって会長だし」

「会長だもんね」

「・・・・・・会長だから」

「答えになってない！　何？　その会長方程式！！」

片梨は、わけ分かんないと声を張り上げた。なんで分かんないのかな～

「あ～転校生。そろそろ決闘を始めたいのだが・・・・」

「えっ、あっ、すいません」

言い合いに夢中になっていた片梨は注意されてようやく我に返り、いそいそと元の場所に戻っていった。

「すいません、こっちの都合で決闘を受けてもらったのに迷惑をかけてしまって」
「気にするな、最近は私に挑戦するような骨のある奴がいなくて、退屈していたところだ。迷惑どころか、むしろお礼を言いたい気分だよ」

会長は鷹揚と嬉しそうに返事をした。

「では、行きます。辻先輩」
「私を楽しませてくれよ、転校生」

戦いの火ぶたが、切って落とされた。

第5話　「会長ｖｓ転校生」の世界（後書き）

奏：「ところで友人、彼女のこと知ってるの？」

友人：「いや、まあ、知ってるといえば知ってることになるな」

奏：「へ～友人に学生能力者警団（キーブ・ガード）の知り合いがいたなんて、知らなかったなあ」

楽也：「・・・・・・・・・・・・・・・・・何とも意外」

友人：「いや、知り合いってほどでもないんだが・・」

片梨：「もう！観戦するなら静かに見ててよね」

第6話　「決着」の世界（前書き）

戦闘描写って難しいですね。

第6話　「決着」の世界

「では、こちらから行かせてもらう」

言うや否や会長の周りに大量の水が出始め、空中を漂っていた。
相変わらず会長の液体操作（リキッドコントロール）はいつ見てもすげえな。

周りに出てきた大量の水は、一つの強い水流となって一直線に片梨に向かって行った。
容赦ない一撃で吹っ飛ばされるかと思ったが、片梨は瞬時に両手を下につけると、瞬く間に氷の壁を生み出して、水流から身を守った。
しかもそれだけでなく、会長の操る水流まで凍りつかせていたので、いったん会長は攻撃をやめ、距離を取った。

「ほう、中々やるじゃないか」
「先輩の方こそ」

二人は互いに、にやりと笑った。

「へ～さすが学生能力者警団（キープ・ガード）。あの会長とまともに戦えてるよ」
「・・・・・・・・・結構すごい」

奏と楽也は片梨の実力を目の当たりにして、少し驚いている。
まあ、実力はだてじゃなかったというわけだな。

「それにしても会長のＩＦは、片梨さんのＩＦとは相性が悪そうだ

ね」
「・・・・・・・・・・・・・・・苦戦するかも」
奏と楽也は、会長が押されぎみなのを不安そうに見ながら、そう言った。
確かに、水を操る会長に氷使いの相手は厳しいように見えるが、
「果たしてそうかな」
オレは、会長が苦戦するとは思えなかった。

片梨は、次々と氷柱（こおりばしら）を凍らせた床から生み出して、会長を追い詰めていった。
会長は氷柱（こおりばしら）を避けつつ、水の弾丸を放って反撃してくるが、片梨は氷の壁でそれを阻む。さらに、会長が攻撃に使った水から片梨は新たな氷を生み出し続けている。
（いける、今の私なら先輩を倒せる）
片梨は会長と直接の面識があったわけではない。
しかし、学生能力者警団（キープ・ガード）内で先輩に当たる姉が度々口にするその名前は、新人であった片梨に“すごい人”という印象を与え、いつしか彼女の目標となっていた。
そして、いつかその人を乗り越えるためにと今まで努力を重ね続けてきたのだ。

（あいつらは私が勝てないと思ってるようだけど、何も分かってないわね。戦いはＩＦの強さよりもむしろ相性の方が重要なのよ。先輩のＩＦでは私のＩＦ・氷結能力（フリーズスキル）には勝てない）

氷結能力（フリーズスキル）、それは－１００℃の冷気を操り、触れたものを瞬時に凍らせる物理干渉系のＩＦ。液体を操る液体操作（リキッドコントロール）には、まさにうってつけの能力である。

「よし、このまま攻め続けていけば勝てる！」

さらに、スピードを上げて会長を追い詰めていく片梨。

だが、会長はこの圧倒的不利な状況で・・・・・・笑っていた。

（この状況で・・・・・・笑っている？）

それは、不敵な笑みとでもいえばいいのだろうか。

相手の力を見極めるため、わざと互角に戦ってるような印象を受ける余裕のある表情。

（ま、まさか、会長は最初から・・）

・・・・・最初から手加減していた！！

考えこむことで作ってしまった一瞬の隙、その一瞬の隙を会長は見逃さなかった。

氷柱（こおりばしら）をくぐり抜け、片梨に向かって一気に大きな水流を放つ。

（しまった！）

完全に不意を突かれてしまい、氷の盾を作る時間は無い。

だが、彼女も学生能力者警団（キープ・ガード）の人間。
咄嗟の事態にも素早く対応する能力をもっているため、会長が放った水流をそのまま凍らせて防ごうと、両手を突き出したが、

（凍ら・・・・・ない！）

水流は何故か全く凍ることなく片梨の体を吹き飛ばし、壁に打ち付けた。

「ぐはっ！」

その一言を最後に、片梨は動かなくなった。

勝敗が決した瞬間だった。

「ふむ、中々楽しかったぞ。これからも頑張って腕を磨けよ、転校生」

会長は久しぶりに手ごたえのある決闘ができたせいか、生き生きとした表情をしている。

「それじゃあ、私は用事があるからこれにて失礼する」

会長はスタスタと屋上から去っていき、残されたオレたちは無事を確かめるために、とりあえず片梨のもとへ向かった。

「おーい、生きてるかー」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・返事がない」
「どうやら屍のようだ」
「誰が屍よ！！」

大きな声でツッコミを入れたため、ごほっごほっとむせかえる、片梨。

「良かった、思ったよりも大丈夫そうだね」
「当り前、こんなんでくたばるようじゃ学生能力者警団（キープ・ガード）はやっていけないわよ」

どうやら、いつもの調子に戻ったようだ。ツンツンした言い方に変わってる。

「でも、悔しいな。結構、自信があったんだけど」
「まだまだ腕が未熟だったということだな」
「むぅ、その言い方むかつく」

オレの言葉に再び険悪なムードになってきたが、決闘で疲れ果てているのか前よりも強くは無かった。

「まあまあ、落ち着いて。あ、そういえばまだ自己紹介してなかったね。僕は七橋奏。で、こっちにいるのが」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・及川楽也」
「あ、私は学生能力者警団（キープ・ガード）星枝（ほしえだ）市支部所属の片梨結、今更だけどよろしく」
「こちらこそ」「・・・・・・・・・・よろしく」

さて、一通り挨拶も済んだことだし、

「奏」

「ん、何？」

「そろそろ昼飯食わねえか」

めちゃくちゃ腹減ってんだけど。

第7話　「能力」の世界（前書き）

～話だけだとさみしいので、もう一つサブタイトルをつけることにしました。

第7話　「能力」の世界

オレたち4人は今、それぞれの昼飯を食べながら雑談に花を咲かせていた。

「へ～片梨さんは学生能力者警団（キーブ・ガード）星枝市支部のリーダーの妹さんなんだ」

「うん、いつかは姉さんを超える能力者になるのが私の目標なんだ」

「でも、会長にあそこまでやられてちゃ、まだまだ先の話になりそうだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・友人、一言余計」

それぞれが、思い思いのことを口にしながら話は弾んでいく。

「は～あ、結構自信あったのになあ。それにしても何で最後の水流は凍りつかなかったんだろう？」

「ああ、確かに」

「・・・・・・・・・・・・・・それは謎」

3人とも首をひねっている。やれやれ、分かって無かったのか。

「あれは、会長の能力だよ」

「「「会長（先輩）の能力？」」」

3人は驚いたようにこっちを見てきた。

「ああ、そういや片梨はともかく、奏と楽也も知らなかったんだったな」

「いや、知らなかったって」

「・・・・・・・・・・・・・・・一体どういうこと？」
「先輩はＩＦを２つ持ってるとでもいうの」
そんなわけない。ＩＦ能力は１人につき１つと決まっているからな。これ常識。
「そうじゃなくてさ、会長の能力ってどんなのか知ってるか」
「今さら何を言ってるんだよ？会長のＩＦ・液体操作（リキッドコントロール）は液体を自由に操る能力でしょ」
奏の答えに、他の二人もうんうんと頷く。
「確かにそうだが、その答えじゃ半分しか正解してない」
「・・・・・・・・・・・・半分？」
「じゃあ、もう半分は何よ」
「ああ、それはな・・・・・」
オレは、彼らに説明する。
「会長の液体操作（リキッドコントロール）は液体の動きだけじゃなくて、性質（・・・・・・）も操れるのさ」
「「「性質！！」」」
よくハモるな、こいつら。
「そう、性質。おそらく会長は生み出した水を、凍りにくいアルコールに変えて水流を放ったんだ」
「でも、私の氷結能力（フリーズスキル）は－１００℃の冷気を操って凍らせるＩＦ。いくら凍りにくくたって」
「純アルコールの氷点は－１１４℃、凍りつくはずがない」

オレの言葉に片梨はぐっ、と黙り込んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・相変わらず知らなくてもいいような知識だけはある」

「本当、雑学に関しては一流だよね」

なんか何気なく貶されてるように感じるのは、気のせいだろうか。

キーンコーンカーンコーン・・・昼休み終了の鐘の音が響き渡った。

「あ、やばっ、早く戻んねえと午後の授業に遅れちまう」

「確か5時間目の授業は体育だったよね」

「・・・・・・・・・・・着替える時間が必要、急がなきゃ」

「あ、じゃあ、また今度ね」

オレたちは、自分の弁当を片づけて屋上を後にした。

5時間目に体育の授業とは、何かとつらいものがある。食べた後にすぐ、運動するのはあまり気分のいいものでないし、体にだっていいはずがない。

「もういっそのこと、5時間目に体育の授業はしないと校則で決めるべきだと思わないか。」

「いや、僕に聞かれても・・・」

少し困った感じの声で奏は返してきた。

今日の体育はサッカーで、２クラス合同で前後半の試合をしている。

オレと奏は後半組なので、前半組の試合をのんびり観戦中なわけだ。

ちなみに、この試合には負けた方のクラスが後片付けを全てやるというペナルティー付きである。

「いや～しかし、サッカーとなると輝いてるよな、山吹は」

「サッカー部の期待の新星だもんね」

校庭にラインを引いたサッカーコートの中で、山吹はドリブルで次々敵をかわし、華麗にシュートを何発もゴールに決めていた。

相手のチームにも何人かのサッカー部員はいるはずなのだが、まるで相手になっていない。

得点が６対０になったところで、さすがにこれ以上は一方的になりすぎて、まずいと思ったのか先生は山吹に交代の指示を出した。

「やべっ、ちょっとやりすぎちまったかな」

そう言って山吹はベンチに戻っていった。いや、ちょっとどころじゃねえよ。

山吹の代わりとして他の後半組が出ることになったが、こんだけ圧倒的にリードしてんなら、もう何もしなくても勝てるなとオレは思

っていた。

だが、

「オイオイなんだよ、この試合展開は」

山吹が交代するまでは6対0だったのに、前半が終わるころになると6対4と2点差にまで詰め寄られていた。

（どんだけ山吹一人の存在がでかかったんだ、このチームは）

確実にチームバランスがおかしいと思いながら、オレは後半戦に入る前に作戦会議が必要だと感じた。

さて、後半の試合が始まった。オレのポジションはGK（ゴールキーパー）。これは山吹の推薦により決まったものだ。

最初に山吹が、

「GK（ゴールキーパー）は友人にするべきだ」

と言ったときは、周りから非難の嵐だったし、オレ自身も少し買い

被り過ぎじゃないかなあと思ったが、次の

「攻撃側は運動のできる人間を少しでも多くした方がいい」

という言葉でみんな納得した。ハハハ・・・・山吹ィィィィ！！

そんなわけで、オレは（不名誉なことに）GK（ゴールキーパー）を任されている。まあ、山吹の作戦のおかげか、前半よりは良い五分五分の試合となっているし、良しとするか。

（こっちは2点もリードしてるし、こりゃオレの出番はないかもな）

上手くいけば、突っ立てるだけで試合が勝ちで終わるかもしれない、とオレが思い始めたとき、

「鏡音、行ったぞ！」

味方の声が聞こえてくると同時に、いきなり前に飛び出してきた敵の一人は、ディフェンスラインを次々突破し、ゴール前までやってきた。

（ん？こいつは）

近くまでやって来た敵の顔に、オレは見覚えがあった。確か名前は・・・・っと、そんなことを考えてる場合じゃない。

その敵は強くボールを蹴った。オレの少し横に向かって、一直線にボールは進んでいく。

オレはそんなに早いとは感じず、これなら止められると思い手を伸ばしたが、

「えっ？」

気付いた時には、目の前にボールはなく、すでにオレの後ろのゴールネットに入っていた。

第8話　「能力」の世界　その2

「は～あ～あ～」

何でこんなことになったのかと、オレは校庭の端でため息をついた。

「何、盛大なため息ついているんだ、友人」

幸せが逃げるぞ、と山吹はせっせとボールを拾っている。

「友人、ボーっとしてないで早く片付けよう」

「・・・・・・・・・・・・終わったこと嘆いても仕方がない」

「はいはい、わかってますよ。」

奏と楽也に注意され、オレは片付けを再開する。

結果から言おう。オレたちは、負けた。

あの後、続けてゴールを2本取られ、6対7で逆転された。

だが、こっちのチームも負けじと攻撃に徹し、何とか試合終了までにゴールを1本取ったので7対7の引き分けとなり、勝敗は各チームのリーダーによるじゃんけんに託された。

で、そのじゃんけんに負けた山吹率いるオレたちA組全員は只今、後片付けの真っ最中というわけだ。

「でも、山吹（リーダー）ならあそこでバシッと勝ちを決めて欲しかったね」

「オイ、運任せの勝負にリーダーかどうかは関係ないだろ！そもそも、友人がちゃんとゴールを守ってくれたら、じゃんけんなんてすることも無かったんだぜ」

「失敬な！　ちゃんとオレはゴールを守ろうとしたぞ。止められなかったのにはちゃんと理由があんだよ」

そう、断じて言い訳などではなく、ちゃんとした理由があるのだ。

「へ～何だよ、その理由って」

山吹が疑わしい目で聞いてきた。こいつ１００％嘘だと思っているな。

「後半３本のシュートを決めたのは全部同じ奴だったろ。そいつは能力者だったんだよ」

「えっ！マジで」

「それ、本当なの、友人」

「・・・・・・・・・・・・・・言い訳じゃないの」

「事実だよ」

マジだし、本当だし、言い訳でもない。大体、サッカー部でもない人間が３連続得点（ハットトリック）を決めることなんて普通に考えればおかしいことだ。

「昔、あいつが能力を使ってるのを一度見たことがあってな」

確か名前は、矢木とか言ったかな。あのメンバーの１人だったけど、もう２年も前のことだから、顔を見てもすぐにはピンと来なかったな。

「で、一体どんな能力なんだ？」

「能力名は反応鈍化（スローモーション）。対象とした人の反応速度を下げる精神干渉系のＩＦだ」

オレが気付くと、ボールがゴールに入っていたのは、ボールが速くなっていたのではなく、自分の反応速度を下げられていて速くなったように感じていたから。
これじゃあ、いくら頑張ってもボールを防げるわけがない。

「でも、何だかそれってずるいよね」
「・・・・・・・・・・卑怯」
「ま、別にいいんじゃない。公式試合ならともかく、これは授業の一環、言わば遊びなんだし」

当然、授業中に能力の使用は禁止されているが、この体育の時間は、先生の目が完全に行き届かないため、結構使ってる人が多い。（もちろん、テストの時や人に危害を加えるような能力の使用は別だが）よって、体育の時間は能力使用ＯＫというのが生徒間の暗黙のルールとなっている。

「あ！　そういえば、今日屋上で会長と女子がバトってたっていう噂を聞いたんだけどさ。それ本当か？」

山吹が急に思い出した様な感じで、オレたちに聞いてきた。

もう噂に・・・いや、あそこまで派手に暴れたら当然か。

「どうせ今日もお前らあそこで飯食ってたんだろうし、知ってるよな！　な！」
「う、うん、まあね」

山吹の勢いに気圧されながら答える奏を見ながら、そういえば、山吹はこういう話好きだったな、とオレは一人苦笑した。

星枝市某日某所。

荒い息遣いをしながら壁に寄り掛かる1人の男がいた。服が所々破けていて、そこから血が流れている。

「はぁはぁ、くそっ！！　一体何なんだ、あいつらは」

幸運にも娑婆（しゃば）に出られたと思った矢先、男は急に変な奴らに攻撃された。

そこからはいくら逃げても奴らは現れ、追いかけてくる。

もう男は体力・精神力共にボロボロの状態となっていた。

（くっ、こんなことなら、先にあいつらと連絡を取っておくべきだったか）

男は脱走したときに、散り散りになっていった仲間を思い浮かべていた。

あいつらも今の自分と同じ目に会っているかもしれないと思うと、何ともやりきれない気持ちになる。

（とりあえず今はあいつらに見つからないように隠れて、傷と体力を回復することに専念しよう。そうすれば俺のＩＦで・・・・）

ガクンっと、男の意識はそこで途切れた。

第9話　「休日」の世界（前書き）

9日に初めて感想をもらいました。結構感想って作者の励みになりますね。

第9話　「休日」の世界

今日は土曜日だ。もう一度言おう今日は土曜日だ。
普通の公立高校に通うオレは、本来なら1週間に2日しかない貴重な休みを満喫しているはずなのに、なのに・・・・・

「何でこんな朝早くに、ストーカーまがいのことせにゃならんのだー！！」
「しーっ。友人、そんなに大きな声出すと気付かれるよ」
奏は口の前に人差し指を立てて、静かにするように言った。
はぁ、こんな朝早くに買い物に行くぞって奏から電話がかかってきたときには、さすがにおかしいとは思ったけど、まさかオレと一緒に奴を尾行するための口実だったとは。
あのときの嫌な予感はやっぱり当ってたんだなあ。

オレたちは今、この前奏をさらった不良たちの一人の跡を追っているところだ。
実は後で調べてわかったことだが、奏をさらった不良たちは「ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ」とかいう、この地域で最も勢力のある3つの不良グループの内の一つで、あの発火能力（パイロキネシス）使いはその副リーダーの座についていた男らしい。
だが、この前の件を聞いたリーダーは“獲物を逃すようなクズはいらん”とその副リーダーを集団でボコった後、グループから追放した。

さらに“『ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ』に楯突くと、どうなるか教えてやらないとな”とオレと奏を標的（ターゲット）にした暴行（リンチ）作戦を行うため、オレと奏の素性を調べ上げている、という話を奏が動物情報網（アニマルネットワーク）から偶然知ったらしい。

「で、それを阻止するためにおそらく本部に向かっているであろう『ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ』の一人を追いかけているってのはわかったけどさ、こういうことはやっぱり、学生能力者警団（キープ・ガード）に任せるべきじゃね」

わざわざ、オレたちが危ない目に会ってまでやる必要なんてないと思うが。

「ダメダメ。学生能力者警団（キープ・ガード）は警察と一緒で、事件が起こらないと行動できないんだよ」

「確かにそうだけど・・・それならせめて、もっと仲間を呼ぶべきだったんじゃないのか？」

「でも、僕たちの問題に他の人を巻き込むのは気が引けるし・・・・」

「オレを巻き込むのも気が引けて欲しかったんだけど」

「あっ、あいつがグループの他のメンバーと合流したよ」

無視かい。まあ、今回はオレにも関係のあることだし、面倒だけど協力するか。

オレたちが後を付けていた不良は、仲間と合流した後、おそらく「ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ」の本部（アジト）であろう、今は使われていない廃れた倉庫らしき建物に入っていった。

オレたちも見つからないように、奴らの後に続いて入る。
入ってみると外もボロかったが中もボロかった。
しかも、そこら中に煙草の吸殻や弁当の容器が落ちていてかなり汚い。
まあ、不良がきれい好きってのもおかしな話だが。

「友人、どうやら始まるみたいだよ」

奏に言われて耳を傾けると、不良たちの真ん中で背の高い一人の男が煙草を吸いながら後ろの壁に寄りかかるようにして立っていた。
どうやら、あいつが「ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ」のリーダーのようだ。

（は～あいつがこの辺りで３強と呼ばれる不良グループのリーダーか。何かあんまし強そうに見えねえな）

目つきの鋭さは論道並みだが、あんまりがっしりとした体格ではなく、なまじ背が高いばかりにひょろひょろのようにも見える。
煙草を吸っていたり、耳にピアスを付けていたりと所々不良らしさはあるが、全体的な雰囲気でいうと副リーダーよりも不良っぽさは劣り、とても荒くれ者の組織を束ねるリーダーとは思えない。
何でこいつがこんなに恐れられてんだ、と不思議に思いながら観察していると、リーダーが口を開いた。

「オイ、沼澤。斎藤が逃がしたっていう獲物の居所はつかめたか？」

威圧するような言い方のせいか、それほど大声でなかったのにまるで怒鳴りつけられたかのように沼澤はビクッとした。

「は、はい、狩谷さん。調べたところ夕波高校の1年で、こっちの小さい方が鏡音友人。もう一人が七橋奏と言うそうです」

恐る恐ると言った感じで、1枚の写真を見せながら説明する沼澤。つーか、説明に若干オレの気にしてるとこが入ってんだけど。

「ほう、この二人か」

写真を手に取り、ふむふむと頷きながら見ている。

「どうしますか、狩谷さん。今日にでも見つけ出して締めてやりますか」

隣にいた別の不良が、勢い込んで聞いてくるが・・

「いや、いい」

写真を握りつぶして捨てると、狩谷は静かにそう言った。

「えっ！で、でも」

「勘違いするな。別に興味が失せたわけじゃない」

そう言うと狩谷は地面を蹴り、　ものすごいスピードでオレたちの目の前に移動した。

「探す必要が無くなっただけだ」

狩谷は不敵な笑みを浮かべていた。

第9話　「休日」の世界（後書き）

用語解説

動物情報網（アニマルネットワーク）

奏のＩＦ・獣王（ソロモン）を駆使して作り上げた情報網。
主にカラス・鳩・野良猫・野良犬などから情報を得て、いち早く事件が起きた時間・場所を把握できる。

第１０話　「休日」の世界　その２

いきなり現れた「ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ」のリーダー、狩谷は、オレたちの姿を見つけると鋭い蹴りを放ってきた。

（くっ！！）

オレたちはあまりにも唐突なことだったので、少しばかり反応が遅れたが、何とかぎりぎりでその蹴りをかわして、距離を取った。対象を外したその蹴りは、オレたちが隠れる壁にしていたドラム缶へと向かっていく。

バコン！！

とても人間の蹴りとは思えないほど盛大な音を立ててドラム缶はへこみ、転がっていった。

オイオイ、あんなのくらったら骨折どころじゃないぞ。

（ちっ、迂闊だったな。『ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ』のリーダーが能力者だった可能性を考えなかったなんて）

副リーダーが能力者だったのだから、リーダーも能力者であろうことは容易に予想できたはずなのに。だが、いつまでも過去の事を悔やんでも仕方がない。大事なのは今、この状況をどうするかということだ。

（目の前にいる敵は、狩谷含めて２６人。そして、おそらく能力者は狩谷一人）

例え能力者がいたとしても、あの発火能力使い以上ではないから戦力としては無能力者と同じ扱いでいいだろう。

（さて、この状況をどう乗り切るか）

オレは静かに考え始めた。

「へっへ、まさかあいつらの方からやって来るとわな」

「飛んで火に入る夏の虫とはこのことだぜ」

「覚悟しろよ」

取り巻き不良どもは口々に、思いっきり三下が言うような台詞を吐いている。

「友人、どうする？」

奏は自分たちの状況がかなりまずくなってきてるので、不安そうに尋ねてきた。

「あ～そうだな・・・」

色々考えてみたが、やっぱこれしかない。

「奏、ちょっと耳貸せ」

オレは奏に、さっき考えた作戦を話す。

「・・・というわけだから、頼むぜ」
「えっ、でも、それじゃあ友人が・・・」
「オレなら大丈夫。オレのＩＦは時間稼ぎに向いてるしな」
「で、でも」
「これの他に方法がないんだから、仕方がない。つーか、奏のトラブルにオレが巻き込まれるのはよくあることだ。『今は』気にするな、『今は』」
「わ、わかった（そんなに、『今』を強調しなくても）」

オレの作戦にようやく同意した奏は、くるりと不良たちに背を向けると外へ逃げた。

「おい、あいつビビって逃げ出したぜ」
「仲間見捨てて逃げるたぁ、感心しねぇな」
「はっ、所詮あいつは偽善者だったってわけだ」
「だがなぁ、『ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ』から逃げられると思うなよ」
「だが、まずはこいつから先に殺るとしよう」

次々と奏を口汚く罵った後、不良たちは鉄パイプやら金属バットなど不良っぽい武器を持って近付いてきた。

「オイ、お前ら。あんまりやり過ぎるなよ。オレの楽しみが無くなるからな」

狩谷は、残忍な笑みを浮かべながらそう言った。人間として、ああは成りたくないな。

「分かってますよ。狩谷さん」

鉄パイプを片手に持っている沼澤と呼ばれていた男は、そう答えるとオレに向かって走り出した。
他の不良も沼澤に続いて一気に向かってきた。
（やれやれ、勇ましいな。わざわざ、そっちからやって来るとは）
オレはあいつらのあまりの勇まし（無謀）さに、思わず感心してしまった。

ズルッ、ゴーン。

先頭をきって走っていた沼澤が、派手にすっ転んだ。それを合図にしたかのように、次々と不良たちが転び始める。

「この野郎っ、うおおぉ！！」
「『ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ』をコケにするとどうなっ、るわわわぁ！！」
「くたばりやがっ、うおわぁぁ！！」

まるで新喜劇のように転びまくる不良たち。結構シュールで面白い光景だ。

さて、もう気づいているとは思うが、不良たちが転びまくってるのはオレのＩＦ・摩擦力（ブレーキ）の応用だ。
氷の上を走ったときとは逆の力、つまり摩擦力を減らし、この倉庫の床を油を塗ったかのように滑りやすくした。
そこを全力で走れば、あの山田公一と同じ結末を迎えることになるだろう。（・・・哀れだ）

「くそっ、こんな奴に」
「能力を使うなんて卑怯な」

「『the midnight』の本気を見せてやる」

・・・・・・・・・・・・・・・・最初から本気出せよ。

そんな風に口々とあいつらは何か言ってくるが、さっきの事で警戒してるのか、向かって来る者はいなかった。

（しかし、時間稼ぎのつもりだったんだが・・・・）

すでに結構の不良たちが転びまくり、背中やら顔やら頭やら体のあちこちを打って倒れていた。

しかも転ぶときに、武器が他の不良に当たるというような、思わぬ2次災害（ハプニング）を引き起こし、色々ともうぐちゃぐちゃな状況だ。

（やれやれ。いくら、下っ端で無能力者（いっぱんじん）だと言っても『the midnight』のメンバーだろ。本当にこいつらは3強のうちのひとつなのか）

思わず、そう考えてしまうほど手ごたえがなかった。

「けっ、役立たずが」

狩谷は、自分のメンバーが勝手に自滅していった様を見ながら呟いた。

「the midnight」のメンバーが能力者とはいえたった一人に、しかもこんなにあっさりと負けたのが腹立たしいようだ。

狩谷はイライラをぶつけるように、そこに倒れている不良の一人を蹴り飛ばした。

ガッ！！バキッ！！

音からして、確実に肋骨2，3本は折れたな。

「ぐわぁ！！」

「失せろ」

吹っ飛んでいった不良は、そのまま倉庫の壁に激突し、気絶した。
狩谷の周りにいた不良たちは、自分も八つ当たりの対象になってはたまらないと思ったのか、後ずさりして離れていく。

「容赦ないね。仲間はもう少し大切にすべきだと思うが」

「はっ、何言ってやがる。使えねえクズを大切にしたって意味ねえだろ！」

嘲るように言う狩谷に、オレは少々嫌悪感を覚えた。

「やれやれ、悲しいな。能力者が、無能力者（いっぱんじん）と比べて優越感に浸っているとは」

「はぁ、何言ってんだ？　俺は、たとえ能力者相手でも負けやしねえよ！」

狩谷はオレに向かって、一気に走り出した。

「今までの様子を見てなかったのか？」

床はオレの能力で滑りやすくなっているというのに。

「構わねえよ。要は、床に触れなきゃいいんだろ」

そう言うと狩谷は、倒れている不良たちを踏みつけて、こっちまでやってきた。

（仲間を足場にするとは。どこまでもひどい奴だ）

踏みつけられた不良たちは“ぐぇ”だの“ぐはっ”だのとうめき声を上げ、痛みで顔をゆがませている。敵とはいえ、この仕打ちには同情する。

そんな非道な行動によって、オレの方まで来ると、すかさず蹴りを入れてきた。

「食らいな、強化電気（エレキブースト）！！」

（強化電気（エレキブースト）？）

・・・・・・・それが奴の能力か。

そんなこと考えつつ、オレは蹴りを避ける。

速いことは速いが、さっきとは違い、来ることが分かっているので余裕で対処できた。

「甘いな」

狩谷は蹴りが外れたのがわかると、すかさずオレに拳を叩きこんだ。

「ぐはっ！！」

さすがにこれは避けきれず、オレはそれをまともに食らってしまった。

蹴りほどの威力はないだろうが、それでも並みとは比べものにならないパンチ力に、オレは倒れた。

「オイオイ、もう終わりかよ。もっと足掻けよ」

狩谷は、あの不良と同様にオレを蹴飛ばそうと、足を振り上げた。

「くっ！！」

痛む体を何とか動かして、ぎりぎりでその蹴りをかわす。

「へぇ～案外やるなぁ。自分で言っておいてなんだが、普通、俺の拳をまともに食らったら、たいていの奴は気絶するか動けなくなるんだが」

「ははっ、確かに普通に食らってたらヤバかったね」

オレは意味ありげな言い方をした。

「なるほど、やっぱり能力か」

その通り！っとオレは心の中で呟いた。

さっきの拳に当たる直前に、オレは奴の拳の周りの空気の摩擦力を上げて減速させ、ダメージを減らした。（それでも十分痛かったが）

「はっはっは、お前の能力面白ぇな。床滑りやすくしたり、ダメージ減らせたり。何の能力かさっぱりわかんねえけど」

「そうかい。でも、オレはもうお前の能力が大体わかったけどね」
「何だと？」
「お前の能力・強化電気（エレキブースト）は筋肉の電気信号を操作し、一時的にパワーアップできる能力だろ」
筋肉は、神経を介した電気的刺激によって動かされている。だから、そこを電気系の能力でいじれば、飛躍的に力を上げることが可能となるのだ。今までの人間離れした力も、これならば説明がつく。
「安易に自分の能力名をばらしたのが、あだとなったな」
オレは少し得意げにそう言った。
「ふっ、くはははは」
オレが言い終わると、何故か突然、狩谷は笑い始めた。
「何がそんなにおかしい？」
「いや、おかしいだろ。確かに俺の能力を言い当ててはいるけどよ」
くっくっくっと未だ笑いを噛み殺しながら、続ける。
「それがどうした！理解したところで、今のお前に防ぐ術は何もねえ！」
「くっ！！」
悔しいが、確かに奴の言うとおりだ。たとえ相手の能力がわかっても、オレには防ぐ手段なんてない。
「さぁてと、楽しいお喋りもここまでだ」

狩谷は、さっきと同じように足を振り上げた。

（くそっ、まだか、まだ来ないのか）

「とっとと、くたばりやがれぇ！」

（くそっ！！）

やはり、間に合わなかったのか。

希望を断たれたオレが、これから来るであろう痛みに対して身構えた時だった。

ヒュン、ガコッガコッガコン。

突然、上から数個のドラム缶が狩谷に目がけて落ちてきた。

空気を切る音で上から来る落下物を察知した狩谷は、急いでその場から離れる。

「何だ？何が起こったんだ？」

目の前で起きたことに、疑問の表情を浮かべる狩谷。

よし、ぎりぎりだったけど、何とか作戦は成功だ。

「やれやれ、ようやく来てくれたか」

オレは、倉庫の入り口に視線を向ける。

そこには、幼馴染の奏と並んでいる不良っぽい雰囲気を持ったクラスメート、鳴岡論道の姿があった。

第１１話　「鳴岡論道」の世界　（前書き）

ようやく論道本人が初登場。今まで名前しか出てきませんでしたからね。

第１１話　「鳴岡論道」の世界

「友人、大丈夫？」
「ああ、何とかね」

オレは、ゆっくりと立ち上がった。
まだ体は痛むが、論道の邪魔にならないように離れなくてはいけない。

「悪いな、巻き込んじまって」
「別に。暇だったから、来たまでだ」

オレの言葉に無愛想に答えた論道は、目の前の敵に身構える。

「何だぁ！　お前もそいつらの仲間か？」
「仲間かどうかは微妙だが、お前の敵であることは確かだ」

相変わらず無愛想なまま、論道はポケットからビー玉を取り出した。

「はっ、何だそれは。そんなオモチャでオレを倒せるとでも思ってんのか？」

バカにしたような狩谷の言葉を無視して、論道は手にあるビー玉を１つ投げつけた。
余裕綽々な顔で見ている狩谷。だが、その余裕は１秒ともたなかった。

次の瞬間、投げつけられたビー玉が一瞬で消え、代わりにドラム缶が現れたからだ。

「なっ！！」

気付いたときにはすでに遅く、狩谷はドラム缶にぶつかった・・・・・と思ったが、

「おおっと！！」

狩谷はぎりぎりでそれをかわした。

「ふぅ、危ねぇ、危ねぇ」

「さすがは『ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ』のリーダー。そんなに簡単にはくたばらないか」

「当たり前だろ。とはいっても、強化電気（エレキブースト）で反射速度を上げてなけりゃヤバかったがな」

狩谷はそう言いながら、気味の悪い笑みを浮かべていた。

「反射速度も変えられるのかよ、あの能力は」

「大丈夫かな、論道君」

オレと奏は、彼らの戦いから少々離れた場所で観戦していた。
手は貸してやりたいが、今のオレは負傷しているし、隣にいる奏は能力上、戦闘には不向きで役に立たない。

「つまり、今のオレたちじゃ見守ることしかできないということか」
「・・・そうだね」

奏は心配そうな表情で見ている。最近よく見るな、奏の心配そうな表情。
作戦とはいえ自分勝手な都合で巻き込んでしまったのは、さすがに申し訳ないと思っているのだろう。

でも、まあ、論道なら心配いらないだろうとオレは思う。

「あいつの能力は会長同様凄ぇからな」

オレは、自然とそう呟いた。

「全く、次から次へと妙な能力者がやってくるなあ、オイ」

狩谷は堪ったもんじゃねえ、と呟きながらも、楽しそうな表情をす

る。
元々、彼にはバトルマニアの気があるので、相手が強ければ強いほど倒した瞬間の喜びを想像して興奮するタイプの人間なのだ。

「しっかし、空間干渉系の能力者が相手とは。ちと厄介だな」
「へぇ、一応目と脳は付いてんだな」
「はっ、バカにし過ぎだ。お前がさっきからバカスカ出しているドラム缶がこの倉庫のだと気付かないわけないだろ」

周りを見てみると、論道がやって来る前には倉庫の隅の方に5，6個あったドラム缶が、今はすべてなくなっていて、代わりにビー玉がそこにあった。

「これが、お前の能力か？」
「ああ、俺のＩＦ・交換移動（イクスチェンジ）だ」

交換移動（イクスチェンジ）。

対象とした二つの物体の位置を入れ替える空間干渉系のＩＦで、論道は主にビー玉を能力の交換対象に使う。
また、位置を交換した物体は交換する前の物体の運動エネルギーを受け継ぐような形となる。
つまり、投げたビー玉と静止しているドラム缶の位置を交換すると、ビー玉と同じスピードでドラム缶が飛んでくるというわけだ。（最も、質量が急激に変化するわけだから、すぐにスピードは落ちていってしまうが）

「ほう、初めてだぜ。空間干渉系の人間と戦うのは」

狩谷は、楽しそうな表情のまま言った。

「そうかよ。じゃあ、きっちり脳に刻んでおけよ。お前が空間干渉系と戦うのは、これが最初で最後だからな」

そう言うと論道は、ポケットに手を突っ込み、両手の指の間全てにビー玉を挟み込んだ。

「くらえ」

論道は、手にあった8つ全てのビー玉を投げつける。そしてそのビー玉は一瞬で鉄骨に換わった。

（なるほど、数で攻める気か。けどな、）

狩谷はビー玉が鉄骨に換わった瞬間に動き始めた。

（強化電気（エレキブースト）で反射速度と脚力を上昇させれば避けれなくはねぇ）

人間とは思えないスピードで狩谷は鉄骨を次々避けていく。

だが、論道の方は全く焦った様子がない。

それに気づくことなく、狩谷は突き進んでいく。

「へっ、こんなのいくらでも・・・っ！！」

順調に鉄骨をよけていた狩谷は、急に動きを止めた。

なぜなら狩谷は、論道が最初に友人を助けるために移動させたドラム缶に、三方を囲まれていたからだ。

（こいつ、俺をここへ誘い込んだのか！）

狩谷は、ようやく自分が罠にかけられたことに気付いた。

論道の無差別にも見えた鉄骨の攻撃は、視線を上にしてドラム缶に注意を向けないようにし、逃走ルートを狭め、確実にぶつけるための罠としての役割も担っていたのだ。

もちろん、ドラム缶を蹴り飛ばしたり、飛んで乗り越えることたりすることで、障害を突破することはできるが、そんなことをしてる間に鉄骨は必ず自分に直撃する。

どう考えても、鉄骨が自分に当たるのは避けられない、と狩谷は悟った。

（やられた！！まさかここまで考えていたとは）

ズガン！ズガッ！！ズガガガ！！！

凄まじい音を立てて、鉄骨が狩谷に降り注いだ。

第１１話　「鳴岡論道」の世界　（後書き）

空間干渉系の能力も初登場ですね。
ちなみに、離れた場所から自分の方へ移動させる瞬間移動（テレポート）はアポート。

自分の方から離れた場所へ移動させるのはアスポートと言うそうです。

第１２話　「限界」の世界　（前書き）

突然ですが、自分はライトノベルでは「バカとテストと召喚獣」が一番好きですね。
自分の周りの人はあまり読んでる人はいないんですが・・・・・・。
皆さんはどんなのが好きなのでしょうか？

第12話　「限界」の世界

「か、狩谷さん！！」
「やべぇよ。あれじゃ、さすがの狩谷さんも・・・」
「何言ってんだ！そんなわけあるか！！」

遠巻きに見ていた不良たちは、リーダーがヤバくなってきたからか、いきなり騒ぎ出した。（いつの間にか、オレの摩擦力（ブレーキ）ですっ転んでた不良たちも起き上って、巻き込まれないように離れたところで観戦していた）

「さて、次は誰が相手になるんだ？」

論道は奥の方で固まっている不良たちに視線を向けると、不良たちはひっ、とおびえたように縮こまった。

（3強の不良グループもビビらせるとは、さすがは論道）

その目つきの悪さは、伊達じゃない。

「オイ、鏡音。今、何か俺に対して物凄い不名誉な事考えなかったか」
「キノセイデスヨ」
「何故片言になる？　そして何で、です口調なんだ？」

呆れたような声を出す論道。全く、何でこいつはこんなに勘が鋭いんだ？

「オイオイ、無駄口叩いてるとは、ずいぶんと余裕じゃねえか」

論道の背後から不意に声が聞こえてきた。
その方に目をやると、ギギギッと鉄骨が徐々に動き始め、バタンッと狩谷が鉄骨をどかして現れた。

「なっ！　あれくらって、まだ動けるのか」

さすがに論道も驚いたようだ。うん、もはや、あいつは人間ではないな。

「はっ、俺の強化電気（エレキブースト）は神経系に流れる生体電気を操作する能力だ。その気になれば、痛覚の神経部分に流れる電気信号のみを遮断し、痛みを感じなくすることも可能なんだよ」

あ～なるほど。だから、あの攻撃を食らっても平気そうなのか。

だが、

「だが、痛みを消しても、ダメージを消したことにはならないぜ。あれだけのダメージを受けた後だ。無理に体を動かそうとしても、すぐに動けなくなる」

論道がオレの思っていたことと同じことを言った。
そう。狩谷は平気そうなことを言ってるが、所々に打撲の跡が見られ、体がボロボロなのが一目でわかる。

だが、狩谷はその言葉を笑い飛ばした。

「はっ、それがどうした！　俺が動けなくなる前に、お前を倒せばいいだけの話だろうが」

狩谷は強化電気（エレキブースト）で脚力を上げて、オレたちを見つけたときのように一瞬で、論道に目の前にやって来た。

「うらぁ！！」

掛け声とともに、蹴りを論道に向けて放つが、論道は能力で自分自身をドラム缶と交換移動し、それをかわす。

ガコン！！ドラム缶がそんな音を立てて、吹っ飛んでいった。

「オイオイ、さっきの時よりも威力上ってんじゃねえか」

「とても満身創痍に見えないね」

オレと奏は鬼神のように戦う狩谷に、畏怖の念を抱かずにはいられなかった。

「ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ」のリーダーという立場につけたのは、ＩＦがあるという理由だけでは無いようだ。

「でも、この勝負は論道君の勝ちだね」

唐突に、奏が論道の勝利宣言をした

「どうしてだ？」

「だって、考えてもみてよ。交換移動（イクスチェンジ）は言ってみれば、条件付きの瞬間移動（テレポート）能力。近距離攻撃しかできない相手から、逃げ続けるのは難しくはないでしょ」

「つまり、狩谷が動けなくなるまで論道君が逃げ続ければ、戦わずして勝利・・・か」

「そういうこと」

奏は論道の勝利を確信してるようだ。確かに奏の言う事も一理あるが、

（そう、簡単にいくといいが・・・）

オレにはまだ、一抹の不安が残っていた。

二人の戦いは激しさを増していた。

狩谷は能力で強化された蹴りや拳を次々と放つが、論道に交換移動（イクスチェンジ）で全てかわされている。

それでも、狩谷がむしゃらに攻撃をし続けるため、論道の方は全く余裕が見られない。

「オラオラ、どうした。チョロチョロと逃げ回ってんじゃねえぞ！」

正拳突きをまたもかわされた狩谷は、攻撃が当たらないもどかしさからか、かなり苛立っているようだ。

「ちっ、オラァ！かかってこいよ」

その言葉と共に狩谷は蹴りを放った。

当然、論道はさっきと同じように交換移動(イクスチェンジ)でそれを避けるが、

ガッ！！

・・・・・一瞬の事なので良く分からなかったが、そんな鈍い音が聞こえた気がした。

交換移動(イクスチェンジ)で移動した論道の方を見てみると、腕を抑えながら息を切らせ、うずくまっている。

どうやら、交換移動(イクスチェンジ)の発動が間に合わなかったようだ。

（ヤバいな。論道の方がアイツより早く限界が来たみたいだ）

オレは、内心恐れていたことが現実になったと感じた。

通常、能力者が能力を発動させるにはそれなりの集中力が必要となる。

オレや狩谷のような単純な物理干渉系の能力なら、それほど集中力もいらないが、論道のような三次元空間を移動するような能力となると、難しさは飛躍的に上がり、かなりの集中力が必要になる。

論道は交換移動(イクスチェンジ)を連続で使いすぎたせいで、集中力が乱れて発動が遅れ、狩谷の攻撃を受けてしまったようだ。

あの様子から見るに、蹴りの威力を全て受けたわけでは無さそうだが、それでもまともに集中できないくらいの痛みはあるようだ。

「はっ、どうやら限界なのはお前も同じだったようだな」

狩谷は勝ち誇ったかのような顔をしている。

「もう、お前は能力を使えない。ってことは、もう避けることができないことだ」

嫌な笑みを浮かべる狩谷に、論道は顔をしかめる。

「残念だったな。俺をここまで追い詰めたことは褒めてやるが、どうやらこの勝負は俺の勝ちだ」

ギャハハハ、と狩谷の不快な高笑いが響く。その中で、論道は静かに立ち上った。

「ああ、そうだな。もう避けるのは止めだ」

「あぁ！？何言ってんだ？」

論道の言葉に、疑問の声を上げる狩谷。

「元々、俺は逃げ勝ちなんて真似は好きじゃない。お前とは拳（コイツ）で決着をつける」

論道は、狩谷の目の前で拳を握って見せた。

「面白ぇじゃん、いいだろう。これで最後にしてやるぜ！」

そう言うと、狩谷は強化電気（エレキブースト）で一気に迫ってきた。

一瞬で論道の目の前にやってきた狩谷が、凄まじい勢いで拳を放つ。

「・・・・・そうだな、これで最後だ！」

論道も蹴りを受けていない方の腕で、狩谷に拳を放つ。

ベキッ！！ドサッ。

そんな音がした後に、片方の人間が倒れ、片方の人間は拳を入れたポーズのまま立っていた。

（・・・・・勝負はついたか）

オレは、拳を入れたまま動かない論道を見ながら、ようやく終わったと感じることができた。

第１２話　「限界」の世界　（後書き）

戦闘描写がどうも単純になってしまいました。
・・・・やっぱり戦闘描写は難しい。

第１３話　「休日編終了」の世界

ふぅ～、と長い息を吐いた論道は、ゆっくりと拳を引っ込めた。
息はまだ荒いが、大丈夫そうだ。

「論道君、大丈夫？」
「心配ねえよ。片腕が少々痛むが、それだけだ」
「何かごめんね、僕たちのために」
「ふん、別にお前らのためじゃないさ。俺もこいつらには借りがあったしな」
「やれやれ、相変わらずクールな奴だな」

心配して近くに寄り、声をかける奏に、素っ気なく答える論道。

（うん、いつも通りだ）

オレは、二人の様子を見ながら、安心した。

「う、嘘だろ。狩谷さんがやられるなんて・・・・」
「俺たち・・・やばくないか」

リーダーが完全に倒されたので、おろおろし出し始める不良たちを、沼澤が一喝した。

「オイ、こんなことでビビってんじゃねえ！それでもお前らは『ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ』の一員か！」

・・・・・・さっきまで、ずっと観戦していた人間が何を言うか。

「で、でもよぉ」

「よく考えてみろ。こっちは人数が奴らの１０倍以上あるんだぞ！！それに、あの論道とかいう奴も狩谷さんとの戦闘で、もう戦えない。今が絶好のチャンスじゃない・・・くぁ！？」

強気な口調で仲間を奮い立たせていた沼澤は、論道によって殴り飛ばされた。

ズサササッ！！

地面を引きづって、倒れた沼澤を見て、ヒッ！と弱腰になる不良たち。

「誰が戦えないんだ？」

論道はそう言いながら、不良たちを睨んだ。（相変わらず凄い迫力だ）

それが引き金となって不良たちはヒィィと悲鳴を上げ、全員バタバタと尻尾を巻いて逃げていった。

（仲間を見捨てるのは感心しないんじゃなかったのか？）

つくづく言葉と行動が一致しない奴らだ。

ま、これで、もうオレたちが狙われる心配もないし、一件落着だ。

「さて、用も済んだし、とっとと帰って・・・・」
「・・ま・・だ・・だ・・・」
「「「!?」」」
後ろから、今、オレたちが最も聞きたくない声が聞こえてきた。
振り向くと、そこにはフラフラになりながらも立ち上っている狩谷の姿があった。
「まだ立ち上がれるのかよ」
不死身か、こいつは。
「信じられない」
「ヤバいな、俺はもう限界だぞ」
二人も相当驚いている。
「当た・・り・・ま・・えだ、こん・・なとこ・・で・・負けて・・・」
バサッ!!
狩谷は一歩一歩、力無い足取りで近づいてきたが、途中で気を失い倒れた。
強化電気(エレキブースト)で体を酷使しすぎた結果だな、こりゃ。
とにもかくにも、これで本当に一見落着だ。

「やれやれ、肝を冷やしたぜ」
「怖かったね」
オレと奏は、ドサッとその場に座り込んだ。しかし、あんなになってまで戦うって普通じゃねえな。（ほぼ、屍化してたし）一体、どんだけ喧嘩好きなんだか。
「これが、奴の最後・・・か」
論道は、気絶した狩谷を見ながら、何やら呟いていた。
そういや、さっき何か因縁めいたこと言ってたな。
（まあ、オレは別に興味ねえから聞かないけど）
自分以外のことには関心０なオレは、ヨイショと立ち上って、二人に声をかけた。
「さ～て、論道、奏。いつまでもこんな汚いとこにいないで、帰ろうぜ」
「え、でも、この人を放っておいたら・・・」
「安心しろ。俺が、学生能力者警団（キーブ・ガード）に連絡を入れておく」
そう言うと、論道は携帯を取り出して、ボタンを押し始めた。
「別に、放っといてもいいんじゃない」
オレたちをボコろうとした奴だし、その他にも色々とひどいことをしてきた男だ。
こうなったのも全部自業自得、因果応報。
だから、わざわざ助けてやる必要なんて無いとオレは思う。

だが、オレの言葉に、珍しく奏が強気な口調で返した。

「ダメだ！　助ける人間を区別するのは、絶対にあってはならないことなんだから！！」

奏は真剣な表情をしている。全く、こいつは昔から変わらないな。そういうところは。

「はいはい。分かったよ」

ま、こいつの性格は分かり切ってるし、オレも今更何か言おうとは思わない。だけど・・・

（やっぱり、オレには真似できないことだな）

オレは、はぁ～と深いため息をついた。

そんなこんなで、連絡を終えた論道と共にオレたちはこの倉庫を跡にした。

やれやれ、「休日」なのに全然休めない日だったな。

その後、狩谷という男は病院で手当てを受けた後、少年院に入るこ

とが決まった。

リーダーを失った「ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ」は自然消滅し、その一員だった不良たちは他のグループに入ったり、新たなグループを立ち上げたりして自分たちの新たな居場所を作っている者もいるらしいが、大半は未だ過去を捨て切れず、その辺をフラフラさまよっているらしい。

この事件を受けて、他の２つの不良グループが論道に注目しだすのだが、それはまた別の話である。

第１４話　「もう一つの休日」の世界（前書き）

前の投稿からずいぶん遅くなりました・・・・。
すいません。

第１４話　「もう一つの休日」の世界

「ｔｈｅ　ｍｉｄｎｉｇｈｔ」と色々あった日の翌日。

オレは、今日こそ休日を満喫しようと家の中で携帯ゲーム機でプレイしながら、ダラダラゴロゴロしていた。（ちなみに、オレの両親は昨日から泊りがけで旅行に行ってるため、オレは今、完全に自由気ままな生活をしている）

昼近くまでそんな感じで時間をつぶしていると、突然家の電話が鳴りだした。

（うっ、何か嫌な予感がする）

以前の奏の電話の時と全く同じように、オレは直感的にそう感じ取った。

だが、やはり出ないわけにもいかないので、オレは仕方なく受話器を取った。

「はい、もしもし。どちら様ですか」

「私だ」

ガチャン！！　ブチッ！！

オレはすぐに受話器を戻して電話を切り、二度とかけてこないようにコンセントを抜いた。

「さて、ゲームの続きでもやろ・・・・・」

ピンポーン

何事も無かったかのように自分の部屋に戻ろうとしたオレを、玄関のチャイムが阻むかのように鳴り響いた。

（まさか！いや、いくらなんでも考えすぎか）

オレは今自分が考えた不吉な想像を追っ払い、扉を開けた。

そこには凛とした空気を纏わせている、自分がよ～く知っている会長こと辻先輩が立っていた。

オレはすぐさま扉を閉めようとしたが、閉めきる前に会長が手を入れてきた。くそっ！反応が早い。

「何故、私の姿を見たとたんに扉を閉めようとするんだ、ゆーじん」

「・・・わざわざ言う必要があるんですか」

オレと会長は玄関の前でお互いに扉をつかみながら、一進一退の攻防を繰り広げていた。

「というか、会長。一体どうしてオレの家の電話番号と住所を知ってるんですか。個人情報保護法違反で訴えますよ」

「君が気にするところはそこなのか？ここは普通『何故、家の前にいるのにわざわざ電話してきたか』について突っ込むべきだろう」

「知りませんよ。どうせ下らない理由でしょう」

「失敬な。『電話した後にすぐやってきて、ゆーじんの驚く顔でも

見ようかな』という理由のどこが下らないんだ！」
「最初から最後まで、全部だよ！！」
三流の漫才みたいなやり取りをしている間にも、扉は徐々に開いていく。
元々オレは、そんなに力が無いので、女とはいえ先輩の進入を阻止するのは至難の業だ。
「くっ、いい加減放して下さい、会長。さもないと大声で『襲われる！！』と叫びますよ」
「それは、普通女の子が使う台詞じゃないのか？」
男だろうと女だろうと、今はそんなの関係無い。会長に進入を許してはならないんだぁ！
「やれやれ、ゆーじんがそこまで反抗的ならば、やむをえまい」
そう言うと、会長は片手に水の塊を作り出した。
「おい・・・・・・まさか」
「“液体操作（リキッドコントロール）”」
水の塊は凄まじい水流となって、オレの体を吹き飛ばした。（相変わらずムチャクチャだなこの人は）
床に倒れたオレは、ゲホッゲホッとむせかえりながらも、会長の進入を阻止するため、すぐに立ち上がる。
だが、オレが起き上った時にはすでに会長は何事も無かったかのように、自然に靴を脱いでオレの家に入っていた。

「ふう、他人の家にはいるのにＩＦを使用したのは初めてだな」
「他人の家にはいるのにＩＦを使用しようとする人間は会長だけだと思うけどな」

やれやれ、全くたまったもんじゃないな。

オレと客人？である会長は一階のリビングに行き、向かい合っているソファーに腰掛けた。

「で、一体オレに何の用ですか？会長」

オレはこの所々常識の抜けた会長に色々と言いたいことがあるが、それは一先ず置いといて、オレの家に電話してきたり直接やってきたりした目的を聞くことにした。

「うむ。それはな、ゆーじん」

会長は一呼吸置き、もったいぶるかのように話した。

「私の護衛をやってみないか」

第１５話　「学生能力者警団」の世界（前書き）

そろそろ、一年も終わりますね。

でも、その前に期末試験が・・・・・・

第１５話　「学生能力者警団」の世界

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

オレの第一声がこれだった。

「いやいやいや、一体何言ってんですか、会長」

この人は落ち着いた見た目とは裏腹に思考がとんでもなく突拍子なのは、中学の時にすでにわかっていたことだ。

だが、それでもさっきの言葉は全く理解できない。

「ん、わからないのか。君に私の護衛役を頼みたいんだ」

会長は、さも当たり前のことを言ったのにすぎないという表情だった。

「いや、だから、何でオレが先輩の護衛をしなきゃいけないんですか」

そもそも、何で護衛が必要なのかがわからない。

確かに会長は成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群の完璧人間だが、唯一「財力」という単語は会長のオプションには入って無いため、命が狙われることなんてないはずだ。

（まあ、普通ここまで完璧なら金持ちであってもおかしくないとは思うけど、世界はそこまで甘くないということなのかな）

例え金持ちだったとしても、会長はそこらへんの護衛よりは強いだろうし、どっちにしろ必要無いと思うけど。

「実はな、学生能力者警団から応援を頼まれたんだ」

「へ～そうですか」

学生能力者警団は所属していない者でも実力が認められていれば、本人の意志により臨時として協力することができる。

大規模な事件が発生したときに学生能力者警団の人材だけでは足りなくなるかもしれない、という点から考慮された制度だ。

そのため、学生能力者警団じゃない会長にも応援要請がくるのはそう珍しいことではない。

「だが、事が事だけに私も慎重に行きたくてな。パートナーとして護衛を一人連れて行くことにしたんだ」

「だったら、オレじゃなくても他の人を連れて行けばいいでしょう。何でわざわざオレなんですか？」

奏や論道や楽也や副会長の方が、オレよりもはるかに役に立つだろうに。

「そう謙遜するな、ゆーじん。君はこの私を本気にさせた3人のうちの1人じゃないか」

「いや、確かにオレは会長を本気にさせたけど、別に勝ったわけじゃないんですけどね～」

やれやれ、勘弁して欲しいぜ。他人に必要以上の期待を向けるのは。

「ま、そういうことだから今すぐ出発するぞ、ゆーじん」
「謹んで断らせていただきます」
「集合場所は学生能力者警団(キープ・ガード)星枝市支部の入り口で・・・・・・」
「さて、ゲームの続きでも・・・・って痛ェ！！」

丁寧に断ったのにもかかわらず勝手に話を進める会長を無視して、2階の自分の部屋に上ろうとしたオレの頭に、会長のチョップが炸裂した。

「全く、人の話はちゃんと聞くのが礼儀というものだぞ、ゆーじん」
「平然とその言葉を吐ける、会長の無知厚顔ぶりには怒りと呆れを通り越して殺意がわいてきましたよ」

理不尽な暴力を受けた頭をさすりながら文句を言うオレは恐らく、いや絶対に間違ってはいないだろう。

「どうしても嫌なのか」
「当たり前です」

何が悲しくてせっかくの日曜日を潰してまで、無償活動(ボランティア)をせにゃならんのだ。

わがままで理不尽な女子の頼みをなし崩し的に聞くような奴は、漫画かラノベの中にしか存在しないものなんだぜ。（奏は例外かもしれないが）

「そうか、それならば仕方ない」

オレがきっぱりと断ると、会長は残念そうな顔をしたが、どうやらあきらめてくれたようだ。

（やれやれ。疲れた、疲れた）

オレは今度こそ自分の部屋に戻ろうとリビングのドアに手をかけると、会長がいきなり独り言のように呟き始めた。

「実は護衛役を引き受けてくれたら、お礼として『ソミュール』のレアチーズケーキでも御馳走しようかと思っていたんだが、そこまで嫌なら無理強いするわけには・・・・・」

「会長、早くしないと置いてきますよ」

オレはすぐに玄関に行き、靴を履いて、家を飛び出し学生能力者警団（キープ・ガード）星枝市支部へ歩き出した。

「・・・・・君は本当に身の代わりの速い男だな」

会長に呆れた視線を向けられるが、オレは気にしない。

世の中臨機応変に対応することこそが大切なのさ。

それから３０分ほど歩いて、オレと会長は学生能力者警団（キープ・ガード）星枝市支部に到着した。

警察署と言うよりは市役所の感じに近いコンクリート製の建物の下には、2台のバスとKGと書かれたバッジを胸に付けた中学から高校くらいの人たちが12～3人程集まっている。

オレと会長がその人たちの中に姿を現すと、ほぼ全ての人が会長の姿に畏敬の視線を送り、ひそひそと小声で話し始めた。

（ま、そうなるわな。会長はこの町では結構な有名人だし）

オレは会長の後に続きながら歩いていると、小声であるが会話が自然と耳に入ってきた。

（彼女が執行(うち)部のリーダーと互角の戦いを繰り広げたと言われる、辻志季か）

（何でも中学時代に、この町で能力を悪用する輩の9割は彼女に倒されたとか）

（彼女が通った後には、人どころか草木1本も残らないらしいぜ）

（化け物だな）

何か若干、ゆがんだ認識が広まってるようだが。

「よう、久しぶりじゃんか。友人」

不意に後ろから、オレは声をかけられた。

会長ばかりが注目される中、オレに声をかけてくる奴がいたのが意外だったが、振りかえるとそこには誰もいなかった。

（何だ？空耳か？）

オレは疑問に感じながらも、これから学生能力者警団（キーブ・ガード）と共に行う活動場所に移動するので、一先ず置いておくことにした。

「そういえば、今回会長は何の応援を頼まれたんですか？」

目的地に向かっている学生能力者警団（キーブ・ガード）専用のバスの中で、オレは今更ながら会長に今回の活動内容を聞いた。

学生能力者警団（キーブ・ガード）の活動は、様々な種類がある。

町のパトロール、能力者・無能力者の犯罪行為の取り締まり、災害・事件時の一般市民の救助、特警（対能力者特別警察）の事件捜査の協力等々。

もちろん、いくら能力が使えると言っても学生であることには変わりないので、大きな事件では補佐役程度だが、小から中くらいの事件（能力者による喧嘩の仲裁やひったくりなどの軽犯罪）なら任せられるくらいの権限を持っている。

「ああ、私は護衛対象の身辺警護。要はＳＰのようなものだな」
要人の警護というのは学生能力者警団（キーブ・ガード）の活動の中でもとりわけ珍しいものだ。
「へ～そうですか。それで、会長は一体誰を護衛するんですか」
自分で言って気付いたが、護衛する人が自分の護衛を頼むってのはおかしくないか。
「ふっふっふ、聞いて驚くなよ。何とあの飛鳥くるみの護衛なのだ」
会長は胸を張って答えたが、
「誰ですか、それ？」
生憎オレはその人を知らなかった。
「何っ！お前飛鳥くるみを知らねえのか」
突然、前の座席に座っていたおそらくオレよりも年上らしい坊主頭の人が会話に割って入ってきた。
「えっと、誰ですか」
「学生能力者警団（キーブ・ガード）執行部所属の芦田だ」
芦田という人は少し偉そうな言い方をする、なんか野球部にいそうな感じの人だった。
「ちなみに、くるみちゃんファンクラブ会員Ｎｏ１９５でもある」

そう言って会員証を見せつけてきた。心なしか少し得意げな様子である。

「え～今までの話から察するに、その飛鳥くるみという人はアイドルなんですか」

「そうだ。しかもただのアイドルじゃないぞ。くるみちゃんは2年前に15歳でデビューを果たして以降、その小悪魔的性格と整った容姿・スタイルから瞬く間に数万人を超えるファンを生み出し、最近じゃ数々の雑誌やドラマにも出演している今、話題沸騰中の超売れっ子アイドルなんだぜ」

「へ～。そんなに有名な人なんですか、会長」

「ああ、正直彼女を知らない人間の方が珍しいぞ、ゆーじん」

会長に本日2度目の呆れた目をされた。

（んなこと言われてもな～。オレ、アイドルとか全然興味無いし）

普通の人なら、たとえファンでなくてもトップアイドルに会えるなら、多かれ少なかれ興奮するものだろうが、オレは全くそういう気持ちは起こらなかった。

むしろ、そんなに売れっ子なら後でサインでも頼んで、ネットオークションで高値で売ろうかな、という邪なことを考えるくらいだ。

（正直、どうでもいいんだよなあ～。オレは『ソミュール』のレアチーズケーキさえもらえれば）

両手を頭の後ろに組みながら、護衛って何時までだろうか、と思うオレであった。

第１５話　「学生能力者警団」の世界（後書き）

自分もあまりアイドルとかは、知らないですね。

最近の若い子は全部同じ顔に見えてくるんで。

まだ大学生なのに、オジサンっぽい発言ですね。

第１６話　「アイドル」の世界（前書き）

バトル展開が中々出せません。

一応、超能力バトルの小説なんですけどね。

第16話　「アイドル」の世界

しばらくしてバスが、目的地に到着した。

そこは、のべ一万人は軽く入るであろう巨大なコンサート会場。

しかも、まだ開始3時間前だというのに終わりが見えない程の長蛇の列があった。

オレは知らなかったが、どうやら本当に大人気のアイドルのようだ。

オレと会長と学生能力者警団（キーブ・ガード）の面々は、会場の裏口から入る。

見張りの警備員さんは胸に付けているKGと書かれたバッジを見ると、すぐに通してくれた。（オレと会長はバスの中ですでにバッジをもらいつけていた）

「は～、何かやっぱ違うな～」

会場内にはプロデューサーらしき人やら何やらたくさんいて、打ち合わせをしてたり機材の確認をしてたりしていた。

さすが、芸能“界”と言うだけあって、世界が違うと本当に思う。

そんなことを考えながら歩いていると、メガネをかけた堅そうなビジスマン風の男の人がやってきた。

「初めまして。私は飛鳥くるみのマネージャーの坂井と言います」

坂井さんは丁寧なあいさつでオレたちを迎えてくれた。

「学生能力者警団（キーブ・ガード）執行部の芦田です」

さっき、バスの中で飛鳥くるみについて熱く語っていた人があいさつを返した。
どうやら、今回の任務の学生能力者警団（キープ・ガード）チームの中で彼がリーダー格のようだ。

「それで、護衛の話なのですが・・」
「詳しい話は中で・・・・・あまり人に聞かれたくないので」
芦田が話そうとすると、坂井さんはそれを止めて、奥へと案内した。
坂井さんの案内でやって来たのは、関係者以外立ち入り禁止と書かれた大きめの部屋。
シンプルというか無機質な部屋で、細長い片仮名のロの形に置かれた机とそれを取り囲むパイプ椅子に、でっかいホワイトボードしかない、会議室らしい部屋だった。
坂井さんに促され、オレたちはそれぞれ自由に座り、話を聞いた。
「実は数日ほど前にうちの事務所に脅迫状が届きまして、内容は“飛鳥くるみを誘拐し、殺害する。止めて欲しければ現金１０００万用意しろ”というものでした」
「・・・・そうですか」
坂井さんの言葉に、芦田は一言そう言うと腕を組んで考え込んだ。
確かに、脅迫状にしては奇妙な内容だ。
ただでさえ、近付くことすら困難な超売れっ子のアイドルな上に、

こんな内容の手紙を書けば周りの人間は警戒し、警備を強めるので殺害は一層困難になる。
犯人の目的が飛鳥くるみの命ならまだしも、金であるならば誘拐してから連絡した方が、まだ効率的だ。
おまけに、脅迫状には金の受け渡し場所も連絡方法も書いてない。
これじゃあ、例え１０００万用意したところでどうしようもないな。

（こりゃ、９９％イタズラだな）

イタズラじゃなければ、送ったのはただのバカだろう。今時、安い刑事ドラマだってもっとましな文章書くぜ。
会長や周りの学生能力者警団（キープ・ガード）の人たちも同じことを思っているようで、明らかにやる気が失われている。

「正直に言いますと、私たちも本気でこの手紙を相手にしているわけではないんですよ」

オレたちの雰囲気から察したのか、坂井さんが苦笑いしながら言う。

「そうなんですか？」
「ええ、だから警察にも連絡してません」
学生能力者警団（キープ・ガード）の１人が聞くと、坂井さんは苦笑いのまま返す。
「ということは、私たちを呼んだのは他の目的で？」
会長が尋ねると、ええ、と坂井さんは答えた。
「実は、あなたたちには飛鳥くるみの監視をお願いしたいんですよ」

「は？　護衛ではなく監視・・・・・ですか？」
「はい、そうです」
いや、いきなりそんなこと言われても・・・・・・・
「えっと、それはどういうことですか？」
会長もよくわからない、という表情をしている。
「あまりこんなことはお話ししたくないんですが、彼女は最近やたらいなくなることが多くて。数日前の握手会のときも、開始１０分前まで街をふらついていて、危く中止になるとこだったんですよ」
「はあ、そうなんですか」
「このままだと、何かスキャンダルになりそうなことに巻き込まれそうで心配なんです。でも、ＳＰを増やせば彼女は気の休まる時がなくなり、ストレスを溜めこんでしまう。そうすると、仕事に影響が出るかもしれない。だから、この脅迫状を理由に警察ではなく、比較的年が近くて、ＳＰの代わりにもなれるあなたたち学生能力者（キーブ・ガード）警団にお願いしたというわけです」
なるほど、さすがはマネージャー。彼女のことをよく考えてある。
「まあ、今彼女は人気絶頂のアイドルで自由な時間がほとんどない状態。抜け出したくなる気持ちは分からなくはないんですけど」
坂井さんは困ったように話した。マネージャーとして彼女を一番近くで見てきたために、考えてることがなんとなくわかるのだろう。
（でも、何か意外だ。見た目では仕事の鬼って感じだったのに、結構彼女に理解を示しているな）

やっぱ、人を見た目で判断してはいけないな、うん。

「わかりました。できるだけ彼女から目を離さないようにします」

芦田が落ち着いた口調で言った。

元々この人は熱狂的ファンなのだから、この依頼は願ったり叶ったりだろう。

（だけど、今のこの落ち着いた様子からじゃ想像できんな）

バスの中の時とは別人のようだ。これは仕事とプライベートを割り切れるタイプの人間だな。

「え～それじゃあ、監視について具体的な話を・・・・」

「た、大変です！」

突然ドアが開き、若いスタッフらしき男の人が息を切らせて入ってきた。

「どうしたんですか？　そんなに慌て・・・・っ！！まさか」

「ええ、飛鳥くるみがいなくなりました！」

部屋の中が一瞬で驚きに包まれた。

第１６話　「アイドル」の世界（後書き）

書いた後で気づきましたが、主人公ほとんど喋ってません。

果たして、この後どうなるのでしょうか。

第17話　「アイドルの休日」の世界

「本当にいないのか」
「はい、10分ほど前に楽屋でちょっと一人になりたいと言ったきり、リハーサルの時間になっても出てこないので自分が様子を見に行ったら、そこには誰もいなかったんです」
「まさか、あの脅迫状を送った奴が！」
「まだそれはわかりませんが、この10分の間にここへやって来たのは学生能力者警団（キープ・ガード）だけなので、その可能性は低いと思います。警備の人に確認したところ、その間にここを出ていった人はいなかったと言ってますし」

二人が話し合っている中、学生能力者警団（キープ・ガード）は護衛（という名目で監視）する予定だった人物が顔を合わせる前に消えてしまったということに対してざわざわと騒ぎだした。

「それで、どうしますか。坂井さん」
「決まっている。スタッフ総出で、一刻も早く彼女を見つけるんだ」
「それはわかってますが、万が一の事も考えておいた方が・・・」
「そのことについては、私が責任者と話し合う。君は彼女を見つけることだけに集中するんだ。何としてもコンサートが始まる前に見つけてくれ」

坂井さんがそう言うと、その若い男の人はハイ、と返事をして急いで部屋から出ていった。

「あの、坂井さん」
「ん？ああ、芦田君。今の話の通り、飛鳥くるみはどうやらいなくなってしまったらしい」

「瞬間移動（テレポート）系の能力者に連れ去られた可能性は？」
「それは、ないよ。この会場はストーカー対策のために外からあらゆる能力を受けない仕組みになっているから」
「なるほど。ということは、まだ飛鳥くるみさんはこの会場内のどこかにいるというわけですね」
「ああ、そうなるね。すまないが、みんなにも探す手伝いをして欲しい」

わかりました、と芦田はオレたちの方に顔を向けると指示を出した。
「とりあえず、みんなで手分けして色々なとこを探そう。飛鳥くるみを見つけ次第、このトランシーバーで俺のところに連絡してくれ」
そう言うと、芦田は全員分の小型トランシーバーを渡した。おお、何か本格的。

みんながそれぞれトランシーバーを手に持ったのを確認すると、芦田は大きな声で皆に言った。

「それでは、各自行動開始だ」
「「「ハイ！」」」

坂井さんや会長も含め、みんなが一斉に部屋から出ていった。

「やれやれ、最初っから面倒なことが起こったもんだ」

トランシーバーを上着のポケットに入れ、渋々、オレも飛鳥くるみを探すために部屋を後にした。

だが、

「そういえば、オレ、飛鳥くるみの顔知らねえじゃん！！」
肝心なことを聞き忘れ、もとい見忘れていることに気付いた。

コンサート会場から、３００ｍ程離れた誰もいないビルの屋上。
そこに一人の人間が一瞬で現れた。
その人は、まだ5月の終わりだというのにサングラスをかけ、帽子を深くかぶり、目立たない服装をしている女性だった。
「ふぅ～。ここまでくれば、もう安心ね。ああ、くたびれたわ～」
彼女は両手を空に向けて、うぅ～んと伸びをした。
「さてと、せっかく自由になれたことだし、まず初めに・・・・」
「どこ行く気ですか？」
不意に後ろから声をかけられ、驚いた表情で振り向いたその女性の

視線の先には、オレンジ色をした左右のレンズがくっついて一つとなっているゴーグルのようなものをかけた、小柄な少年がいた。（オレの事だけどね）

「アンタ・・・・誰？」

「鏡音友人。つーか、人に名前を聞くときは、普通自分の名から名乗るものじゃないの、飛鳥くるみさん」

オレの言葉に、ギクッという効果音が付きそうなリアクションをする彼女。

その反応は、オレの言葉が正しいことを証明している。

「何でわかったの？」

「まあ、こんな場所にそんな恰好でいるのは、物凄く怪しいからな」

オレはゴーグルを外しながら彼女の問いに答える。

「違う。何で私が飛鳥くるみと分かったかじゃなくて、何で私がここにいると分かったかってことを聞きたいのよ」

「ああ、そっち。それはコイツのおかげ」

そう言ってオレは手に持ったゴーグルを見せた。

「これはスキルスコープと言って、ＩＦの力を視覚化できる道具だ。こいつを使って辺りを探ってみたら、楽屋にごくわずかな空間の歪みを発見したのさ」

彼女の顔を知るために、あっちこっち行っておいたのが思わぬ形で役に立った。

空間の歪みは瞬間移動(テレポート)系の能力が使われたことを示す。
だが、あの会場は外からあらゆる能力を受け付けない仕組みになっていると、坂井さんは言っていた。
能力を受け付けない会場なのに、何故空間の歪みがあったのか。
それは、外から楽屋の中に瞬間移動(テレポート)したのではなく楽屋の中から外に瞬間移動(テレポート)したからと考えれば辻褄が合う。
つまり、飛鳥くるみは瞬間移動(テレポート)能力者だったのだ。
「んで、その後外に出たオレは、スキルスコープを使って周りから新しい空間の歪みを探して追って、ここまでやって来たってわけ」
飛鳥くるみは、まだ能力を上手く使いこなせてないようで、結構短い距離を連続で飛んでいたため、ここを見つけるのはかなりたやすかった。
「そんな便利な道具、見たことも聞いたことも無いんだけど」
「当然。これはまだ実験段階の試作品で、世に出回って無いものだからな」
「何でそんな貴重なもの持ってんのよ？」
「それは秘密」
ま、別に秘密にするほどのことじゃないんだが、これ以上無駄話しをする気はない。
「さて、世間話もこれくらいにして、とっとと会場に戻ろう」

オレは飛鳥くるみに戻るよう促した。だが、

「・・・・・・・・・・・・・・イヤよ」

「はぁ？」

「イヤイヤイヤ！ぜ～ったいにイヤ！！」

駄々をこねる子供のごとく、拒否しまくる飛鳥くるみの姿は、年下であるオレから見てもかなり子供っぽかった。

「だって、もう何か月も休みなしの超過酷スケジュールでいつもいつも仕事仕事仕事。少しくらい休んだっていいじゃない！！」

・・・・そんなこと、オレに言われても困るんだけど。

「だから、今日こそは思いっきり羽を伸ばすって前々から決めてたんだから！！」

「計画的犯行かよ！！」

オレは精神年齢が急激に下がった彼女を見て、軽い頭痛を覚えた。

（しょうがない。芦田に連絡して、力ずくで連れて行ってもらおう）

たとえ逃げたとしても、場所さえ分かれば学生能力者警団（キープ・ガード）なら簡単に捕まえられるだろう。そう思って、トランシーバーで連絡しようとしたが、

「・・・・アレ？」

オレはトランシーバーを入れておいた上着を自分が着ていないことに、今気付いた。

（そういえば、会場内を走り回っているうちに段々暑くなってきて、どっかで脱いじまったんだよな。そして、そのままどっかに置きっ放しにしちゃったような・・・）

・・・・・・・・・・・ハハ、オレのバカァ！！

オレは自分がやらかしてしまった、失敗に頭を抱えてうずくまった。

「えっと、何かよくわかんないけど、とりあえず退散☆」

飛鳥くるみは、そう言うと同時に瞬間移動（テレポート）で逃げた。

後に残っているのは、オレとオレを取り巻く暗い空気だけ。

はぁ～、ほとんど何もやってないのにすごい疲労感だ。だが、いつまでも落ち込んではいられない。

（さて、これからどうするか）

会場からここまで３００ｍ。大した距離じゃないが、オレが行って戻ってくる間に飛鳥くるみはさらに遠くに行ってしまう。

そうすれば、連れ戻すのに時間がかかり、コンサートには間に合わなくなるかもしれない。

それに、飛鳥くるみが別のトラブルに巻き込まれる可能性もある。

結果として、オレが捕まえて連れ戻した方が効率的だ。

「やれやれ、面倒くさい鬼ごっこにいなりそうだ」

オレは、スキルスコープを再装着して摩擦力(ブレーキ)でビルの壁を歩き下りた。

「はぁはぁ。さ、流石にここまでくれば・・・・」
「追い付いて来られないとでも」
「！！？」
「瞬間移動(テレポート)の移動距離がかなり縮まってきてるぜ」

今さっき持久走を終えたばかりのような荒い息をしている飛鳥くるみに、オレは平然とした声で言い放つ。
あの後、飛鳥くるみが瞬間移動(テレポート)で逃げ、オレが追いかけ、追い付かれるとまた瞬間移動(テレポート)で逃げる、ということを5回ほど繰り返した。
結構遠くに来てしまったが、彼女の様子からして、どうやらもう限界のようだ。

「諦めなよ。スキルスコープがある限り、オレを振り切るのは不可能だ」
「くっ！！」

飛鳥くるみは観念したようで、その場にペタンと座り込んだ。

（やれやれ、手間かけさせやがって）

全く昨日といい今日といい、オレが何でこんな苦労しなくちゃいけないのだろうか。

「んじゃ、戻ろう」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「ん？お～い、聞こえてる」

返事が無いので、近くに寄ってみると、うつむいていた飛鳥くるみはガバッと顔を上げて両手を合わせた。

「お願い！！一回アトラクションに乗るだけでいいから、あの遊園地に行かせて」

「遊園地？」

追いかけることに集中していたので、自分が今いる場所を把握してなかったが、辺りを見渡すと、少し先の方にジェットコースターや観覧車が見えた。

どうやら、彼女はここに来たかったようだ。

「・・・・・・そんなに、遊びたいのか？」

オレの質問に黙って頷く飛鳥くるみ。そういえば、坂井さんも自由な時間がほとんどない状態と言っていたし。トップアイドルといえど、まだ１７歳。遊びたい気持ちがあるのだろう。

「でも、後２時間半くらいでコンサートが始まっちまうぜ。そんなことしてて、間に合うのか？」

ここから会場まで歩いておよそ４０分。少し寄り道しても間に合わ

ないことは無いが、打ち合わせとか、リハーサルの時間も必要も入れると足りないんじゃないかとオレは思う。オレがそのことを彼女に伝えると、

「大丈夫。打ち合わせは前日に済ませたし、練習なんかしなくても、私ならぶっつけ本番でも成功させられるから」

と得意げな笑みを浮かべて答えた。

だからお願い、と再度手を合わせて懇願する彼女の声には真剣な想いがこもっていた。

「でも、数日前に脅迫状が送られてきたんでしょ。そんな時に遊びに行くって危なくないか」

オレは坂井さんから聞かされた話を思い出し、彼女に言った。

というか、たとえあれが９９％性質の悪いイタズラであっても、あんなのが送られてきたら普通しばらくは外出を控えようとするんじゃないか？

オレの説得の言葉にけろっと彼女は答える。

「ああ、あれなら心配いらないわよ。だって、あの手紙を書いたの私だし」

「なっ！！」

オイ、今こいつとんでもない発言しやがったぞ。

「自分で書いたって・・・・」

「だって、ああいう手紙を書いとけば、無断外出しても誘拐されたって言い訳にできるし」

しれっと言ってのけるこのアイドルに、オレは心底呆れた。

（まあ、確かに脅迫状にしては奇妙極まりない内容だったが、まさか外出の言い訳のために自分で書いたものだとは）

信じられないことをする奴だ。ある意味尊敬する。

（やれやれ、本当にオレは面倒事に出会いやすいな）

はぁ～、と長いため息をついた後、オレは彼女に向かって言った。

「ま、間に合えるんなら構わないぜ」

「やった～。やっぱり君は話のわかる子だと思っていたよ」

飛鳥くるみはとてもうれしそうな表情になった。

思いっきりテンションを上げまくってる目の前のトップアイドルを見ながら、オレはやっぱり年上には見えないな、と改めて思った。

第17話　「アイドルの休日」の世界（後書き）

今回もバトルがありませんでした。

早く戦闘描写を書きたいです。

第１８話　「高いとこ」の世界

飛鳥くるみ。１５歳でデビューを果たし、小悪魔的性格と整った容姿・スタイルから瞬く間に数万人のファンを生み出した、トップアイドル。

その彼女は今、

「あ～どうしよう！　乗りたいアトラクションが多すぎて１つに絞れないよ～」

と困っているがとても嬉しそうな声を上げて、オレの目の前ではしゃいでいた。

（こいつのどこが小悪魔なんだ？）

オレは飛鳥くるみの普段の姿を知らないから何とも言えないが、おそらく今の姿はファンなら目を疑う光景だろう。

「はぁ、どうでもいいけど早く選んでくれよ」

オレは子供にせがまれて、仕方なく家族サービスをする羽目になった、日曜日のお父さんな気分を味わいながら彼女についていく。

「無理無理。私はこういう時は後悔しないように、じっくり選ぶタイプなんだから」

「だが、くれぐれも時間制限があることは忘れないでね」

「分かってるって☆」

そう言うと、彼女はまたアトラクションの方に目を向けて、自分が乗りたいものを探し始めた。

「で、散々迷った挙句に選んだのがコレかい」

オレは目の前にそびえ立つ、巨大な観覧車を見ながら、飛鳥くるみに聞いた。

「だって、私の乗りたいものは、全部友人君がダメって言うから」

「2時間待ちの大行列があるとこばっか選ぶからだろ」

全く、このアイドルは本当に時間制限があることを分かっているんだろうか。

「じゃ、楽しんできて」

オレがそう言って、離れようとすると飛鳥くるみはえっ？と不思議そうな顔をした。

「一緒に乗らないの？」

「・・・・何で乗る必要があるんだよ」

オレの疑問に、彼女は意外そうに言った。

「だって、友人君は私の護衛でしょ」

「違うな。オレは、会長の護衛だ」

つーか、護衛がこんなとこまで付き添ったら、ストレスが溜まるだろう。。

オレの言葉に、飛鳥くるみはう～んと考え込む仕草をした。

「あ！　もしかして友人君、高所恐怖症？」

「いや、違うけど」

「じゃあ、閉所恐怖症？」

「それも違うけど、何が言いたいの？」

「だって、トップアイドルと密室で二人っきりになれるチャンスを捨てるなんて、健全な男子中学生としてはあるまじきことだよ、友人君」

「・・・・・・・マネージャーに連絡っと」

「ちょ、ちょっと待ってよ。少しからかっただけで、そこまで怒ることないでしょ！」

アンタにとってはちょっとした冗談でも、オレにとってはかなり傷つく内容だったんだよ！（主に中学生の部分で）とオレは心の中で抗議した。

（はぁ、何かもういちいち突っ込むのも面倒になってきたな）

まあ、彼女がいいと言ってるんだし、特に反抗する理由も無いので、オレは飛鳥くるみと観覧車に乗ることにした。

「うわっ、高いね～。友人君」
「そうですね」
「いい眺めだね～」
「そうですね」
「・・・・適当に返事してるでしょ」
「そうですね」

彼女はとても不満そうな表情で、むぅっとふくれていた。

「もう、もっと何か他に言うこと無いの？」
「悪いけど、オレは高いとこからの眺めなら見慣れてるからな」

そう、オレは能力・摩擦力（ブレーキ）のおかげで壁を幾度となく上り歩いてきたため、高い所には結構縁がある。
だから、オレにとっては観覧車の景色なんて今更面白くもなんともない。

「ふ～ん、そうなんだ」

オレの能力の事は恐らく知らないだろうが、彼女は納得したようにうなずいた。

「う～ん、この高さまでくれば大丈夫かな」

飛鳥くるみはそう言うと変装に使った帽子とサングラスを取った。
茶色いツインテールの髪に、つぶらだが、どこか蠱惑的な印象を受ける目。

思わず誰もが振り返る、まさしくトップアイドルの名に恥じない美少女・飛鳥くるみの素顔が現れた。

ずっと変装してたので、精神的に疲れていたのだろうか。
初めて素顔を出した彼女は、肩の荷が下りたかのようにほっとした顔をしていた。

「何かこうしてると、思い出すな～」

外の景色を見ながら、突然、彼女は独り言のように呟いた。

「何を？」
「あ～、それはプライベートな問題だから悪いけど教えられないね」
「ふ～ん、じゃあいいや」

別に興味無いし。

「え？　気にならないの。そこは普通もっと粘るとこでしょう！」
「何だ、聞いて欲しかったのか？じゃあ聞くけど」
「ふふ～ん、そこまで言うんなら、仕方ないわね。特別に教えてあげるよ☆」

・・・・久々にマジでイラッときた。

「実はね、１０年くらい前に私、ここへ来たことがあるんだ」

彼女の声は相変わらずだが、さっきまでの楽しそうな空気が少し違うモノになったとオレは感じた。

「私の両親は私が小さいころから共働きで、休日も忙しくて遊びに

なんてほとんど連れていってもらったことがなかったのよねぇ」
彼女はそのときの事思い出しているのか、寂しそうな表情をしていた。
「そんな中での数少ない思い出の一つがここの遊園地でね。お母さんと一緒に観覧車に乗ってこの景色を眺めて、色々話したな～。お父さんは高いとこがダメみたいで、乗らなかったけど」
ふふっ、と彼女の顔に笑みが戻った。
彼女がやたらとここに来たがっていたのは、ただのワガママだけじゃなかったようだ。
（もしかすると、オレを一緒に乗せたがっていたのもそれかな）
今の彼女は１０年前と同じくほとんど遊びに行けない状態な上に、１０年前とは違って彼女は一人だ。
つまり、あんな風に振舞っていたが、本当は一人でいるのが寂しかったのかもしれない。
「あ！　ようやくてっぺんまで来たみたいだよ」
飛鳥くるみの弾んだ声につられ、考え事をしていたオレも外の景色を眺めた。
相当高い所にきたせいか遠くの景色もよく見えるし、下にいる人間はまるでアリのように小さかった。
高いとこの眺めなんて見慣れているとオレは思っていたが、改めて

見ると結構いいものだ。

（よく考えてみれば、オレが高いとこに行くときって大抵追われてるときだもんな）

そんな状況で景色を楽しめるほど、心に余裕があるわけないか。

さて、観覧車も十分堪能したところで・・・・

「お前らは誰だ？」

オレは、いつの間にか後ろにいる二人組に問いかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8191x/

ＩＦ　「仮定」の世界

2011年12月27日21時55分発行